

文部科学省 ポストコロナ時代の医療人材育成拠点形成事業
東海国立大学機構「医療人類学とバーチャル教育を活用した屋根瓦式地域医療教育」
成果報告

路上の対話を未来へつなぐ

名古屋大学「地域医療フィールドワーク入門」
実習報告書 vol.1

2024年2月

梅村絢美 編
(名古屋大学大学院医学系研究科総合医学教育センター)

路上の対話を未来へつなぐ

目 次

はじめに

「顔」のある学びからローカリティを見出す/つくる	梅村 紗美	2
人がいる、日常がある	荒木 蒼乃	13
フィールドワークを経て感じたこと	酒井 元樹	18
ささやかなフィールドワークを通して	江崎 彩乃	21
冬を越えて～各々の冬を肌で感じて～	鄭 在鴻	24
越冬活動	萩原 くるみ	28
フィールドに出て初めて気づいたこと、考えたこと	吉井 初穂	31
人と人とのつながりの温かさ	水谷 倫乃	34
それぞれの価値観に触れて	林本 愛穂	41
人とのつながりと居場所	古荘 花和	44
おわりに	宮地 純一郎	47

はじめに 「顔」のある学びからローカリティを見出す/つくる

梅村 紗美

本報告書は、文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業として、東海国立大学機構が採択された課題「医療人類学とバーチャル教育を活用した屋根瓦式地域医療教育」の成果報告の一部であり、本事業の教育活動の一環として開講された全学教養科目「地域医療フィールドワーク入門」に参加した学生たちによるフィールドワーク報告である。

「顔」のみえる関係が紡ぎだすローカリティ

コミュニティが形骸化した時代において、地域医療あるいは地域をどう構想するか。人、モノ、情報、資本、診療やコミュニケーションの手段・媒体が地政学的な境界を超えて目まぐるしく流動する今日、地域医療は、地理性や行政区画を土台としたその前提を問い合わせ直す必要があるだろう。本授業は、地域・コミュニティという語が背負う手垢のついた意味をいったん手放し、行政区画や公／私という二元論に回収され得ない「顔」のみえる関係、生活の場、日常のなかに立ち現れるローカリティ＝社会的文脈に注目し、その只中にある患者という経験とそれに対するケアから見えてくる「医療のローカリティ」を、広義の地域医療として構想しようという目論見のもと計画された。

こうした視点をふまえ、本授業では、名古屋市内で生活困窮者に対し生活医療支援をおこなうNPO法人「ささしまサポートセンター」（旧笹島診療所）のボランティアの医師・看護師・ボランティアスタッフおよび利用者の活動にお邪魔をさせていただきフィールドワークをおこなった。学びの場としてこの対象を選んだのは、国籍・戸籍・住所がない人びと（行政区画からの解放）、ボランティア（職務・義務・役割という必然性からの解放）、そしてこうした人びとが繰り広げるケアの実践を対象として、従来の地域医療が担ってきた前提をリセットできると考えたからである。これは、既存の枠組みから外れたところに身を置き、その内部から枠組みを捉え直してみる、という文化人類学に特有の視点を反映したものもある。

上記視点のもと、フィールドワークをおこなうにあたり、本授業では、文化人類学が培ってきた参与観察というフィールドワークの手法を採用した。参与観察とは、透明人

間のようになって観察対象に一切の影響を与える「覗き見」するような観察手法ではなく、対象となる人びとの活動に観察者自ら参与し、行動と共にし、さまざまな葛藤や喜びとともに人間関係の渦に巻き込まれながら、当事者の視点にできる限り近づき対象を観察するという特徴がある。したがって、参与観察において、観察する者は、観察対象となる人びとがそうであるのと同じように、透明人間ではなく、「顔」と人格をもった「かけがえのない」存在として人びとと向き合うこととなる。

「顔」のあるひとりの人間として、「顔」のある人びとと関わり、向き合うことは、職務や役割に還元され得ない人間同士の根源的なコミュニケーションに立ち会い、その当事者として巻き込まれることにつながりうる。今回フィールドワークをおこなった学生たちは、路上で生活する方々やボランティアさんたちから、属性や職務を超えた「人生の先輩」として、さまざまなことを教えていただいた。この姿勢はまた、病気について相談をするためにボランティアの医師のもとにやってきた方が、相談が終わると、今度はその医師を労り、肩や腕をマッサージし始める、といったように、ケアをする側・される側という役割にもとづく関係性が融解する現場を目撃することにつながった。他にも、生活保護を受給しておられる方が、生活に困っている人に役立ててほしい、と支援団体に寄付をしたり、路上生活をしておられる方が、役場が主催する生活困窮者向けの相談会において毎週無給で相談員として働いていたり、「年の近い女性同士」である路上生活者とボランティアとが互いに抱き合い励ましあったり、といった現場に立ち会うことでもあった。

本授業では、フィールドにおいて見られる、職務や役割、属性に還元され得ない、人間同士の「顔」のみえる関係に着目し、義務や必然性がないにも関わらず、人として互いに気遣い合う人びとのコミュニケーションの只中にローカリティを見出すことを大切にしてきた。フィールドワークに参加した学生たちは、「路上で生活しておられる方々も自分らと何ら変わらない普通の人」と口を揃えて言っていた。そこには、「生活困窮者」という属性=レッテルを超えたところでその方をまなざす「構え」がある。役割や属性に還元しえない次元で他者をまなざすことは、「貧困」ゆえに「一方的に支援を受ける人」という先入観から解放されることもある。本フィールドワークを通じて学生たちは、「生活困窮者」「支援を受ける人」という役割や属性を超えたところにある、人間の「ありのままの生」の姿を、自らの「顔」を使ってコミュニケーションを築くことによってとらえてきた。また、何人かの学生は、他者の抱える苦悩や置かれた境遇を理解するため、自分自身や家族にとってのそれらと置き換えて考えた。「顔」を使うとはすなわち、人格をもつ「ひとりの人間」として、他者からまなざされることもある。

そこには、観察する側が観察される、という役割の逆転がある。大学の外で出会う、本名も素性も知らない人から「ひとりの人間」としてまなざされ、行動を共にするという体験は、おのずと自己をとらえなおすという視点へとつながっていった。参与観察によって、フィールドの人びとと「顔」のある関係を築くことは、他者を理解するのみならず、他者の目を通じて新たな自己と「出会い直す」ことでもあるのである。

学生たちは、大学の講義室では経験することのなかった違和感、無意識にもっていた偏見、人と出会うことによる感動や葛藤、言葉にすることの難しさなどをそれぞれに経験し、本報告書にまとめてきた。馴染みのある世界から飛び出し、大学の外で出会う人々との具体的交渉に巻き込まれながら、フィールドで考える。これはとても勇気のいることであるし、歯切れの良い回答を用意すること自体、胡散臭く感じられてしまうくらいに、壮大な取り組みもある。だが、当事者さんやボランティアさんにたくさんのご迷惑ご面倒をおかけしながら教えていただいたもの、学生たちが自らの豊かな感性で学びとってきたものの大きさははかり知れない。

フィールドワーク実習の概要

本授業では、9名の履修学生を3人ずつの3班に分け、班単位でそれぞれ2回のフィールドワークを行った。1回目は、11月の木曜日の夕方、名古屋市内の繁華街の脇にある高速道路の高架下広場で行われる炊き出しと生活医療相談において、相談にいらした方からお話をうかがったり、血圧を測らせていただいたり、衛生用品をお配りさせていきながら、学ばせていただいた。木曜の夕方、医学部医学科がある鶴舞キャンパスに集合し、木曜生活医療相談の会場まで、高速道路の高架下を徒歩で移動しながら、高架下で暮らす人びとの住まいを見学しながら会場を往復した。同じ道のりを歩きながら、往路と復路とで、学生たちの表情や話す言葉が全く違っていることに驚かされた。

2回目は、2023年12月29日（金）・30日（土）の2日間にわたり、名古屋市役所近くの広場で行われる名古屋越冬活動に参加し、そこに集まった方々からお話を伺ったり、河川敷や路上で暮らす方々や生活保護等を受けながらアパートで暮らす方々を訪問したりした。また、炊き出しの配膳や寄付された衣料品の仕分け、炊き出し会場の焚き火に使用する薪割りのお手伝いもさせていただいた。炊き出し会場では、焚き火で暖をとりながら、そこを訪れた方の横に座り、一緒にご飯をいただきながら長時間にわたりお話をうかがいすることができた。

本授業は当初、医学部医学科の専門科目として開講する予定であったが、さまざまな事情により、全学教養科目として開講することとなった。これにより、それぞれ異なる関心をもつ学部学科の学生たちが肩を並べ、ともにフィールドワークを行うことで、思わぬ良い刺激を互いに与え合えたのではないかと思う。また、講義室での講義やディスカッション、フィールドワークのいく日かは、私の同僚であり医師の宮地純一郎先生が駆けつけてくれ、多方面からサポートをしてくださった。とりわけ、医師ならではのご経験にもとづく示唆に富むコメントは、学生にとってとても良い刺激となった。

本フィールドワーク実習においてお邪魔をさせていただいた、生活医療相談が行われる会場あるいは路上は、名古屋市内の繁華街の目と鼻の先にある。初めて会場を訪れた当初、ショッピングを目的として訪れる場所であると思い込んでいた街の一角に、別の意味を担う時空間が広がっていることに私は驚きを隠しえなかつた。しかし本来、車両が通行することに特化した目的で使用される道路（ロード）とは異なり、路上（ストリート）とは、誰もが自由に生きることができる時空間であるはずである。戸籍・国籍・住所がある人もそうでない人も、同じように人生に喜びや苦しみや葛藤を抱えて生きていること、路上というフィールドは、私たちに、根源的な人間の生き様を教えてくれるよう思う。

人が人として人から学ぶということ、その偶発性とリスク・暴力性

本講義および実習は、学生がフィールドに行かなければ決して出会うことのなかつた人びとと出会い、その人びとの置かれている状況に立ち会い、対話し、巻き込まれるなかで、新たな自己と出会い、その自分にしか発することのできない「問い合わせ」を発し、その時点での自分なりの答えに迷いながら近づいていく過程を学習の中核としている。したがって本講義では、学生たちに対し、どんな文脈でも説明できてしまうような「正しい答え」は一切求めていない。また、たとえば昨今の医学教育で注目されている、いわゆる「健康の社会的決定要因」（SDH: Social Determinants of Health）などの議論についても一切取り扱っていない。こうした既存の議論の「答え合わせ」をするために、人びとの生活を“教材”にすることは許されるべきものではないし、頭でっかちな議論にばかり目がいってしまうことで、フィールドで出会う人びとの「ありのままの生」、フィールドに行かなければ出会えなかつた自分自身、気づかされることのなかつた「問い合わせ」を見逃してしまうことを避けたかったからである。

「かけがえのない」人生を生きる学生が、「かけがえのない」人生を生きる人と出会い、学ぶことは、偶発性をともなう。そこでは、予想だにしなかった驚きや感動、あるいは失望や危険が同居している。学生には、可能な限りフラットな態度・目線でフィールドの方々と関わってもらいたく、授業では、フィールドで出会うであろう人びとについての予備情報よりも、人びとと関わり、まなざす際の「身の構え」「ものの見方」について教えるようにした。口を酸っぱくして伝えていたのは、「貧困だけをみていたら見えなくなってしまうことがある」「支援する／されるという役割をとっぱらったところにあるコミュニケーションを見てきてほしい」ということである。そして見事、どの学生もそれをやってのけてきた。ある学生は、当事者さんとの会話が「楽しかった」と報告している。この部分だけを文字通り受けとれば、生活に困窮している方から話を聞いて「楽しい」だなんて不謹慎な、と捉えられかねない。しかしこの学生は、「支援をただ受け取るだけの生活困窮者」としてではなく、「顔」のある「かけがえのない」存在としてこの当事者さんと向き合っている。この方が、ご自身の「かけがえのない」暮らしや人生史（ライフヒストリー）を、懐かしいエピソードとともに「この私」のために話してくださった、このことが純粋に嬉しく、その対話が「楽しい」と言っているのである。そこには、この方を「生活困窮者」というありふれた属性に押し込めることなく、自分自身や家族と同じ「かけがえのない」存在としてまなざす最大級のリスペクトがある。ここにこそ、人が人として人から学ぶことの根源的な意味があるといえよう。そしてそれは、本授業が探求するローカリティにつながりうる。こうした感性は、フィールドに身を投じ、そこで出会う人との「顔」のある具体的交渉に巻き込まれてこそ磨かれうるものに相違ない。

一方で、こうした偶発性は、リスク＝危険という形でも生じうる。私自身、二児の母として学生の親御さんの気持ちを慮り、フィールドワーク中、学生にもしものことがあったら、という心配が消える瞬間は一度もなかった。しかし、こうしたリスクをとってでも、思い切って飛び込んでいくことでしか出会えない世界があり、そこから学べるものの中にはかり知れない。リスクを恐れて教室に留まり講義をし続けることもありえただろう。しかし私には、時代が大きく変わっていくなか、

“リスクを恐れることによる守りの姿勢がもたらす長期的リスク”的な立場”の方が、これからの時代をつくっていく若者たちが避けるべきリスクだと思えてならなかった。こうした、ある意味で無責任で、体当たりとしか言いようのないフィールドワーク実習を無事に終えることができたのは、ひとえに、フィールドでお世話になった当事者さんやボランティアさん、本授業を手伝ってくれた宮地純一郎先生、そして大切なお子さんを快く送り出

してくださった学生たちのご家族のおかげである。馴染みのある世界から飛び出して、大学の外で学びたいという学生たちの意欲を、あたたかく見守りサポートしてくださった皆様には、感謝してもしきれない。

人が人から学ぶことに伴うリスクについて、本実習に関連して、もうひとつ述べておかなければならぬことがある。それが、「教育」という正義を振りかざして人びとの生活の場に足を踏み入れ、話を聞くことが孕む暴力性・搾取構造である。「教育」という聞こえの良い言葉を盾にして、興味本位に誰かの暮らしや人生を一方的に「覗き見」する行為は決して許されるべきものではない。また、教科書にある既存の議論の「答え合わせ」をするための“コンテンツ”として、人びとの暮らしや人生を“消費”する行為もまた言語道断である。人間の「かけがえのない」生やその苦悩とは、そのひとつひとつが既存の一般化された議論で説明し切れるような単純なものでは決してない。私自身、本授業計画を作成し始めた当初より、人びとの生活の場に学生を連れていき話をうかがうことの様々な影響について考え、迷い続け、明確な回答を用意できないままに見切り発車で実習に臨むこととなった。これに対し、少なからぬ罪悪感を感じずにはいられない。実際、学生とともに当事者さんのもとを訪ねながら、本当にこれでよかったのか、と自問せずにいられないこともあった。そうであっても、やはり人びとの生活の場にお邪魔をさせていただき、「顔」を通じてしか学びえないものがあるというのもまた事実で、今回のフィールドワークで巡り合った方々とのたくさんの対話のひとつひとつが、学生たちにとって大切でかけがえのないものであったに違いない。この暴力性を胸に刻みながら、それと徹底的に向き合い、何らかの救済や希望につなげていくことが、この授業を担当する人間が背負うべき責務であると認識している。

コミュニケーションとしてのテクスト（この報告書を発行することがもつ意味）

本報告書は、フィールドワークでお世話になった当事者さんやボランティアさん、そして本授業に直接関わりのない読者にも広く読んでいただくことを想定して編集されている。これは、お話を聞いて「持ち逃げ」する形とならないよう、せめて、学生に話をしてくださった当事者さんやボランティアさんに、学生たちが何を感じ、それをきっかけに何を考えたのか、それぞれの学生なりの言葉で伝えたいと考えたからである。これは、人として人から学ぶ者に課せられた課題であるといえる。また、学生それぞれがこうした意識をもちながらフィールドワークを行い、テクストを書き、フィールドの皆さんに読んでいただくことそれ自体、大きな学びの過程でもある。インターネット上で誰

もが世界に向けて発信できるこの時代に、あえて紙の本として本報告書を発行した意味はここにある。この報告書を手に持ってお世話になった方の元を訪れ、手渡しながら、どんな会話が交わされ、どんな反応をいただくことができるのだろうか。この報告書はまだ、フィールドで交わされる対話の只中にある。

貴重な人生の時間を割いて、当事者さんやボランティアさんが学生たちに話してくださったこと、そしてこの方々との出会いをきっかけに学生たちが感じ考えたことは、本講義に直接関わりのない読者にも開かれたものであってほしい。人びとの生活の場から隔離された講義室から飛び出し、フィールドで学ぶことは、報告書という段階においても、広大なフィールドに巻き込まれているはずだからである。だが、実体験の全てを、そこに居合わせていなかつた読者に伝わる言葉に載せて表現することはとても難しい。纖細な事情を知らない読者に対し、意図せずして誤解を与えることもあるだろう。言葉にすることに伴う葛藤・もどかしさは、本報告書を書く過程で各々の学生が経験しており、それについて講義室でもディスカッションをしてきた。うまい言葉が見つからず、苦し紛れに出てきた言葉に、まだまだ納得がいかず、悩んでいる渦中のまま原稿を提出した学生も少なくないだろう。また、「偉そうな感じがするから書くのをやめた」という学生には、「あなたの感じたことを真っ直ぐ書いてほしい」と背中を押した。そして、「(失礼だと思うけれど)こんなふうに思ってしまった」という学生自身の率直な気づきを、とり繕うことなく正直に書くことには、どんな読者も好感をもつような毒のない綺麗な文章に仕立て上げるよりも重要な意味があると思い、あえてそのまま掲載することにした。読者には、学生たちの書く言葉の裏にあるこうした葛藤を含め、温かい目で受け止めていただければ幸いである。とはいって、本報告書の学生の記述に何か問題があるとすれば、文責は全て、編者であり授業担当教員の私にある。

本書の構成

本実習は、名古屋大学教養教育院が開講する全学教養科目「地域医療フィールドワーク入門」を履修している9名の学生によっておこなわれたフィールドワーク実習に基づき執筆されている。

荒木蒔乃さんは、教育学を学ぶ学生である。この授業を履修したきっかけについて、初回の授業で、「自分の知らない世界を見てみたかった」と語ってくれた。しかし、ボランティアさんから「何を学びにきたのか」という質問の回答に窮り葛藤するなかで、結論や答えを出すことを目的とした学習とは異なる学びがもたらす意味について彼女な

りに考察している。教育学を学ぶ彼女が、「顔」のある人びとの具体的なコミュニケーションに巻き込まれ、そこで悩み葛藤し考え抜いてくれたこと、それでも結論や回答に辿り着けなかったこと、それを素直に言葉にしてくれたこと、彼女のこの勇気を心から讃えたい。

酒井元樹くんは、法学部で社会保障について学んでいる。木曜生活医療相談から大学に戻った際、私の研究スペースで保管していた彼の荷物量に驚いた。ポケット六法、ノートパソコン、ハードカバーの分厚い本2・3冊、これら全部をつめ込んだリュックサックはとても重たいはずなのに、「教授から、六法は肌身離さず持ち歩けと言われているんです」と爽やかな笑顔で答え、軽い足取りで帰っていった。フィールドでは、河川敷で出会った方々とのやりとりから、法律や制度からこぼれ落ちてしまう人びとが抱える事情や、それをカバーする具体的方法について考察した。考えることがいっぱい、彼のリュックはさらに膨れ上がりそうだが、きっと彼なら背負っていけるだろう。

江崎彩乃さんは、理学部の学生である。講義室では、いつも背筋を伸ばして一番前の席に座り、真っ直ぐとした目で私の話を聞きながら、丁寧にメモをとる姿が印象的である。物静かでありながら、内に秘めた情熱と素晴らしい洞察力は、路上訪問の折によく表ってきた。路上で暮らす方のテント前にしゃがみこみ、相手を気遣いながら、彼女なりの大きな声で呼びかける姿は、講義室で見る彼女とはまるで違っていた。彼女の書く文章には、彼女らしい控え目な表現でありながら極めて示唆に富む言葉が凝縮されている。人見知りを自称する彼女が、なぜこの授業を履修したのか、当初は不思議でならなかつたが、当事者さんやボランティアさんと対話をするうち、緊張した表情が次第にほぐれ、壊れるような笑顔で帰っていく姿を見て、やっとその理由が分かった。

鄭在鴻くんは、医学部医学科で学ぶ学生である。医師を志す立場として、当事者さんの抱える身体上の問題について、その背景を分析するのみならず、それが生じる社会構造にまで目を向け検討している。彼は、フィールドで出会った人びとや見聞きした出来事について、どんな言葉で表現したらよいか、言葉を慎重に選び葛藤しながら本報告書を書いていた。こうした姿とは裏腹に、気さくに当事者さんや他の学生と語らい、その場を和ませてくれる彼の姿もまた印象的である。誰もが人に言えない苦悩を抱え生きていること、この事実に真摯に向き合う勇気と冷静さ、それを笑いに変えてくれるような底抜けの明るさと楽観性を兼ね備えた彼のような若者が医師を目指していることをから嬉しく、そして頼もしく思う。

萩原くるみさんは、医学部医学科の学生として本授業に参加した。彼女は、越冬活動の炊き出しを訪れた女性の横に腰掛け、長時間にわたりさまざまなお話を聞かせていた

だいた。なかにはその方ご自身の境遇や弱み、諦めを打ち明けられる場面も少なからずあったようである。自身の弱さや醜さを吐露することは、誰に対してでもできることではないだろう。越冬活動という特殊な場がそうさせたのか、萩原さん自身の他者の苦悩を受け止める素質がそうさせたのか分からぬが、彼女はこの方との出会いをきっかけに、誰かの苦悩を受け止める、という医学部では教えられないが医師として必ず必要となる「構え」を学ばせていただいたように思う。どんな表情でどんな相槌を打ちながら話を聞くか。初めて出会った方が話してくださいたのだから、彼女ならきっと将来、たくさんの患者さんが心を許せる医師になるに違いない。

吉井初穂さんは、医学部医学科の学生である。木曜生活医療相談で当事者さんの横に座り、とても熱心に話を聞く姿は、講義室で他の学生の背後に隠れ、影を潜めている彼女からは想像もつかないものであった。ボランティアさんとの情報共有の際、彼女がその当事者さんからうかがった内容を話したところ、ボランティアさんがひどく驚いておられた。一年以上その当事者さんと関わってこられたボランティアさんであっても聞いたことのない話を彼女は聞いてきたのである。彼女には人の心を開きその言葉を受けとめる力があるのだろう。医師の仕事のひとつは、患者の苦悩を受け止めることにある。勉強や訓練では身につけることのできない、「聴く力」という特別な才能に胸を張つて、将来たくさんの患者さんに寄り添ってほしい。

水谷倫乃さんは、看護学を学びながら本授業を履修しており、本人の関心から、授業時間外にも生活医療相談にお邪魔をさせていただいた。彼女の報告は、当事者さんやボランティアさんとのやりとりについて、豊かな感性と彼女らしいまっすぐな言葉で表現されている。引率していただいた看護師のボランティアさんの姿に将来の自分自身を重ね合わせ、そして当事者さんの語る表情や肌の様子について、自分自身や家族に置き換えて理解し、その方の人生に寄り添おうとする姿など、彼女が人として当事者さんととことん向き合おうとする真摯な姿勢には、驚かされてばかりである。何年か後、看護師となって活躍する彼女と再会できるのが楽しみである。

林本愛穂さんは、医学部保健学科で作業療法を学んでいる。いつでも動き出せそうな軽やかなジャージ姿で講義室にやってくる凛々しい姿が印象的である。報告書では、フィールドで出会った当事者さんやボランティアさんの言動の背景にあるさまざまな葛藤を、自分自身を巻き込みながら考察し、優れた洞察力と驚くほど繊細な感性を見事に言葉にして表現してくれた。バングラデシュでの支援活動で感じた無力感を、越冬活動で出会った当事者さんとのやりとりをきっかけに別の意味へと読み替え、「顔」のある人が「顔」のある人と関わることで生じる、役割に還元しえない重要な意味について重要

な指摘をしている。ここでの気づきは、きっとこの先、彼女自身と彼女が作業療法を通じて関わるすべての人につながっていくことだろう。

古荘花和さんは、医学部保健学科で作業療法を学んでおり、彼女自身の関心から、授業時間外にも木曜生活医療相談や路上でのアウトリーチ活動に参加させていただいた。彼女の報告は、越冬活動でのアパート訪問で一緒に行動をしてくださったボランティアさんとの会話をきっかけに、被災地の仮設住宅に住む方や、路上で生活されている方々の暮らしと自分自身の生活とを重ね合わせ、人とのつながりのなかに心地よさを感じることができる「居場所」が、人が生きる上でいかに重要か、彼女ならではの言葉で見事に表現されている。この視点は、当事者さんを「困窮者」としてだけ見ていては、決して出てこないものである。他者の境遇を自己に置き換え想像してみる、彼女のこの感性は、どの時代・社会にも通底する普遍的な人間理解につながりうるものだろう。

冒頭で、「支援する/される」という関係の融解について述べた。本実習において、これはそのまま、「教える/教えられる」という関係にも当てはまる。フィールドでの学生の言動、行き帰りの道すがら重ねた会話、書いてくるレポート、講義室でのディスカッション、そのひとつひとつが私にとって大いなる学びであり、教員でありながら、学生から教えてもらったものは大きい。どの学生の報告もそれぞれ、その学生ならではの感性によってしか書くことのできない素晴らしい内容だと胸を張って言える。この9名の学生たちと出会えたこと、ともに実習に出かけてゆき本報告書を編むことができたことを心から嬉しく、そして誇りに思う。本当にありがとう。

「地域医療フィールドワーク入門」初年度の報告書のタイトルは、「路上の対話を未来へつなぐ」とした。これには、フィールドでの「顔」のある対話は、誰かから希望を託されることであり、それを背負う学生たちの未来へとつながっていくという意味が込められている。木曜の夜、学生たちが生活医療相談にいらした方の血圧を測らせていただいていたところ、その姿を眺めながら、ある当事者さんが「あの子らは、みんなの希望だな」と目を細めて言っておられた。生まれて初めて血圧計を手にし、緊張しながら初めて出会う女性の横にしゃがんで血圧を測らせていただく若い学生たちの初々しく懸命な姿に、逞しい未来を描いておられたのだろう。学生たちは、フィールドで、たくさんの希望や未来を背負っているのだとそのとき気づかされた。ここで背負った希望を、どうかそれぞれのやり方で、それぞれの未来へとつなげていってくれることを願ってやまない。

謝辞

本授業および本報告書は、文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業の一環としておこなわれた「地域医療フィールドワーク入門」の成果報告である。

本授業を通じてお世話になった、ささしまサポートセンターのスタッフの皆様、ボランティアさんたち、当事者さんたちに厚く御礼申し上げます。ささしまサポートセンター理事長の森亮太先生には、本フィールドワーク実習を受け入れていただきただけでなく、名古屋大学医学部医学科専門科目「行動科学・社会科学」において、ご経験に基づく素晴らしいご講義をいただきました。また、ささしまサポートセンター理事であり、本センターが経営するグループホーム「規俊荘」所長の橋本恵一氏には、フィールドワーク開始前に講義室においていただき、ご自身の実体験にもとづく刺激的な講義をしていただきました。橋本氏には、本報告書の「お披露目交流会」にもお越しいただく予定であり、どのようなご感想をいただけるのか、楽しみな反面、少し緊張もあります。

名古屋大学医学系研究科総合医学教育センター教授の錦織宏先生には、文化人類学を専門とする本学初の医学部専任教員として私を迎えてくださったばかりでなく、私の関心の赴くままに研究教育活動を行うことを多方面から応援いただいております。全学教養科目としては内容が「型破り」な本授業も温かく見守っていただきました。同僚であり、家庭医・総合診療医として診療を行う医師でもある名古屋大学大学院総合医学教育センター特任講師の宮地純一郎先生には、本授業の計画途上から貴重なご助言をいただくばかりでなく、講義室やフィールドに駆けつけてくださったり、本報告書にご寄稿いただくなど、医師ならではのご経験に基づき様々な面から本授業を支えていただきました。

そして最後に、学生たちの夜遅い帰宅を許してくださいり、年の瀬の貴重な時間に大切なお子さんを快く送り出してくださった学生のご家族に心より感謝を申し上げます。

2024年1月 吉日

梅村 紗美

人がいる、日常がある

荒木 蒔乃

私は、今回の授業の中で、「木曜生活医療相談」と「アパート訪問」の活動に参加した。毎週木曜日の夜に、炊き出しをしつつ生活や健康状態についての相談を受け付ける「木曜生活医療相談」は、都会の真ん中にある広場で行われる。私は、先生と数人の生徒とともに参加した。

広場に向かう道中、路上生活をする当事者さんの住まいをたくさん見た。私は小さいころ近くに住んでいたので見たことはあったが、あまり見てはいけない気がしていつも横目で見ていたので、よく見たのは初めてだった。テント、布やビニール袋、木の板、金属製の箱のようなものなど、いろいろなものを組み合わせて作られていた。中には布などが何枚も何枚も重なって分厚い壁になっていたり、木などの固いものを使っているのか高い壁が出来上がっているものもあり、とても長い間ここで生活しているのだと思った。路寒さや暑さへの対策、プライベートな空間の確保など、一人一人がより居心地のよいものへと近づけていった痕跡が見え、路上という環境であってもこれが当事者さんたちにとっての日常生活の場なのだと思ったし、路上だからといって雑に生活しているようには感じられなかった。

広場つくと、大勢の当事者さんが炊き出しに並んでいた。長年この活動をしているボランティアの方の説明を聴きながら現場を一周した。小さな倉庫がいくつもあり、役所の人に黙認してもらって使っているとも話していた。ボランティアの方はときおり当事者の方に話しかけて体調や近況をきいていたが、友達に話しかけているような慣れた様子で、長い付き合いであることが伝わってきた。だが、周辺で路上生活をする人の中には活動によって支援されることに前向きでない人もいて、活動をしていた時にある当事者から“施しを受けるために生きているのではない！”と怒られたことがあったという。私は、きっと中にはそう思う人もいるだろうと思ってはいたが、実際にそう言われた人から直接体験談として聞いて今もその方が活動を続けているのを見ていると、その方はそういわれたときどう感じたのだろうと考えてしまった。

一通り広場をまわってからは、自分で当事者さんに話しかけ生活や健康状態について聞き取りをする時間が設けられた。私がボランティアの方から指示されて話しかけたのは、70代の女性だった。当事者同士で談笑しながら炊き出しを食べる人もたくさんいる中、女性は1人で広場の端の方にちょこんと座っていた。私が話しかけると、始めは

少し緊張しているように見えたが、何度か言葉を交わすうちによく話してくれるようになった。最近自転車から転んでけがをしてしまったそうだが、症状のことよりも、その時の状況や、前に自転車でけがをした時の話、それで入院して大変だった話をひたすら話していて、私は、渡されていた質問用紙にあった質問をきく隙もなく相槌を売っているばかりで、これではまずいのではないかと少し焦っていた。しかし、けがのことと関係ないようなことを話し続ける女性を見ているうちに、女性はこんな風に話す相手がほしかったのではないかと思うようになった。女性から見たら、私は孫くらいの年齢で、このくらいの歳の人とは普段あまり話す機会がないのではないかと思う。私は、質問用紙のことは頭の隅に置いて、女性のよき話し相手になることにした。その後、女性がボランティアで来ている医者の診察を受けるまで、私は女性のおしゃべりをきいていた。

この日私が話しかけた当事者さんはそのお1人だけだったが、私たちは若くて見たことのないボランティアだったので、当事者さんの何人かから、「大学生?」「何を勉強しているの?」と話しかけられた。まだまだこれからが人生だね、日本の希望だね、と言ってくれる人もいた。他の当事者さんも私の両親や祖父母の年代の人がほとんどで、娘や孫のように見えているのだろうと思った。しかし、私はリラックスしてその場にいることはできなかった。当事者さんの中には精神的な病気を患っている人や知的障がいを持っている人もいるし、身なりは衛生的とは言えない。不用意に近づいて何かされないか、という怖さがあった。加えて、当事者さんからは私たちが冷やかしに来ているように見えているかもしれないということもずっと頭にあった。"施しをうけるために生きているのではない"という言葉に表されるような気持ちをおそらくどの当事者さんも持っていて、それを傷つけるようなことをしてしまわないかとても気を遣った。しかも、私はぱっと見健康そうで、きれいな服を着て、大学に通えるような家庭に暮らしている。生活には困っていないし、近い将来にはそれなりの職業に就くことができるだろう。当事者さんからそう見られているだろうということが、私のその緊張感をさらに高めていた。そうしているうちに、この日の活動はあっという間に終わった。

年末、私は、住宅で生活している当事者の方のお宅を訪問する「アパート訪問」に参加した。名簿に書かれている住所を頼りに訪問し、当事者の方に役立ちそうな情報が書かれた紙や鏡餅が入った“福袋”を渡して年末の挨拶をする。私はこの日、ボランティアの方と2人で名古屋市中村区にあるお宅を自転車でまわった。

ボランティアの方は、50代くらいと思われる男性でこの活動にはもう何年も携わっている。私は、中村区に向かう道中で活動について尋ねた。この活動はほとんどボランティアのみで実施しており、ボランティア数十人が入っているLINEグループで活動の

呼びかけや活動報告などをしているそうだ。しかし、いつも参加するのは男性を含む数人程度で、ほとんどの人はグループに入っているものの全く参加しなくなっているのだという。数年前に参加しグループに入った学生もいるそうだが、その人も今は全く見かけないそうで、「あくまでボランティアだから活動を強要することはできないのだが」と話す姿は少し残念そうに見えた。私にも、学校などで似たような経験をしたことがある。その時感じた、寂しい気持ちや、自分のしていることが間違っているのかもしれないという不安、周りから白い目で見られているのではないかという怖さを思い出した。

この日は10件のお宅をまわり、そのうち6件にお住まいの当事者さんに会うことができた。訪問した当事者さんは意外としっかりした建物に住んでいたし、体も見た限りではお元気そうだった。それぞれ、外見には表れない病気や経済状況など、見えないとろに事情を抱えているのだろうと思った。

ある当事者の方の訪問をしたときのこと。外見も住まいも変わったところはなく、始めは「わざわざご苦労様です」と言ってくれていて至って穏やかだったのだが、途中でアパート訪問活動の話になり、“以前にもアウトリーチのボランティアが来たが、「お宅にあがらせていただいて、お茶でもしませんか」などと言ってきて、とんでもない。”と言った。その後も、その方は時折過激な言葉も使いながら話を続けた。私たちに對してその場で攻撃してくるのではないかと思わせるような発言もあった。話をするうちに声が少し大きくなっていたと思うが表情にはそれほど怒りのようなものは現れていなかつたので、どこまで本気かは分からぬが少し怖かった。口調や表情は、冗談で子どもをちょっと怖がらせて楽しませているときのそれのような感じだったが、冗談だとは最後まで言わなかつたし、終わりにかけてだんだんと内容が過激なものになつたので、かえって怖かった。もしかしたら本当に何かされるかもしれないとも思った。ボランティアの男性は、そうですか、それはすみません、と何度も言いつつ、相づちを打っていた。当事者さんへの返答に困っているように見えたが、それほど動搖している様子ではなかつた。後からきくと、以前にもこの人に同じようなことを言われたことがあるようだった。「そういう人がいるというのは分かっているけど、人間だから、実際言われるといい気持ちはしないよね」と言っていた。

私は、この当事者さんに対し、少し怖いと感じる一方で同情するような気持ちも持つていた。今回のような言動をしていたら、周りの人は怖がったり腹を立てたりして離れていくが、当事者さんの言動は簡単には変わらないと思ったからだ。人がそのように離れていくということに気がついていないのか、自分の主張が正義だと強く思っているのか。当事者さんのこの言動は、子どもの頃の環境やとてもショッキングな出来事など

が作用して、何かに気がついていなかったりどうしても変えることのできないことがあったりして生まれているのだと思う。つまり、当事者さんが望んでそうなったわけではないし、当事者さんが自力で変えることはほとんどできることなのだと思う。何が幸せかは人それぞれだ。しかし、私は人に理解されず、距離を置かれながら生きるのはつらい。しかも、そのことに気がつくこともできずにいたら、もっとつらい。そのように感じながらも、やはり距離を置かないわけにはいかない自分もいて、申し訳ない気持ちになった。そして、身近にそのような人がいたら私はずっとこの葛藤と鬪わなければならぬのだろうと思うと、この当事者さんが私にとってこれきり会わない相手であることにほっとしてしまった。

また別の当事者さんで、ささしまサポートセンターへの寄付金を渡してきた人がいた。以前にも何度か別のボランティアの人に渡そうとしたそうだが断られたそうだ。ボランティアの男性は「受け取れません」と何度も伝えたが、そのたびに“その時よりは少額だから。いつももらっていることへのお返しとして受け取ってほしい”と寄付金を差し出した。最後はボランティアの男性が折れて受け取って帰った。

私は、どちらの気持ちも共感できると思った。当事者さんは、日ごろの活動に対する感謝が確かにあっただろうし、一方的に何かをしてもらってばかりでは少し居心地が悪いと感じていたのだと思う。ボランティアの男性は、生活に支援を必要としている人がその生活費になるはずのお金を渡してきたのだから、当然受け取るのには抵抗があっただろう。私だったら、支えられている身であるのに簡単に人にお金をあげてしまう当事者さんに説教してしまいたくなるかもしれない。しかし、この日のような状況で、私も最後はボランティアの男性と同じことをしたと思う。あれほど差し出してくるのを断り続け、渡せずに一人で残念そうにする当事者を残してお宅を去るのは、当事者さんの生活費のためと言っても罪悪感が残るだろう。自分も人に何かを与えることができる、喜ばせることができるということが、当事者さんの支えになっているのかもしれない。

私が行動を共にしたボランティアの男性は、50代くらいに見える方で、あまり笑わない人だった。いきなりボランティアに参加してきた学生に対して不愉快さを感じているかもしれないと思っていたので、緊張した。最初、たくさんまわりたいので早めに歩きましょうと言われたときや、アウトリーチ活動について、今は参加しなくなってしまった学生のボランティアの例を挙げつつ残念そうに話しているのを見たときからは、なおさらだった。活動をする中でボランティアについてなどいろいろと教えてもらったが、その緊張感は最後まで消えなかった。

終盤になって、この授業で何を学ぶのかときかれて、お邪魔している身なのでどきっとしたし、明確に答えられなくて困った。活動を見学して、フィールドワークというものを体験することが授業の目的ですという回答でしたが、一体何のために学んでいるのかという点に答えられない説明になってしまった。自分が授業をとった動機を伝えればうまく答えられるかもしれないと思ったが、当事者のような生活をしている人やそのような人と関わることについて興味があったから、という動機を伝えることに躊躇してしまった。「興味」というと、当事者を冷やかしたりばかにしたりしているようにとられてしまうのではないかと思ったからだ。あいまいな説明を続けて、最後はなんとか“社会勉強みたいなものです”と答えた。

この活動全体を通しての感想をまとめるのは難しい。先日、路上生活者らしき人を見かけた。前と変わったことは、それを見たときに、この人にも日常生活があるのだと思ったことだ。以前は、どうして路上で生活することになってしまったのだろう、どんな思いで生活しているのだろう、というマイナスなことばかり頭に浮かんでいた。今はそれよりも、毎日どうやって過ごしているのだろう、話してみたらどんな人なのだろう、ということが浮かんだ。明らかにより豊かな生活をしている自分との差を意識して葛藤する気持ちはやはりあるが、出会った当事者さんや、同じような生活を送る人への見方が少しだけ変わったと思う。

最後に、今回の授業は、自分の感じたことをそのまま表現することが許される、むしろ求められる場だった。人前で自分の気持ちをダイレクトに表現することには少し難しさも感じたが、私はそれが楽しいとも感じた。学校の課題で提出するような感想文は、「何を学びましたか」という内容を問うものが多く、何か確実な“学び”を得たと言えるものを書かなければならぬという窮屈さを感じることが多かった。今回の授業では自分の感じたことそのものが成果として扱われ、すぐさま「学び」という形にしなくてよいのだという心地よさを感じた。このレポートも、読んでの通り、何の結論もない私の純粋な感想でできている。だからこそ、当事者さんやボランティアの方々にも、堂々とお見せできる気がする。

フィールドワークを経て感じたこと

酒井元樹

今回の越冬活動で、私はささしまサポートセンターの方の生活医療相談に同行させていただきました。はじめに、庄内川の河川敷で生活している方々を訪問しました。衣服や食料、医療セットなどを支給し、話を伺い、血圧計とパルスオキシメーターで体調確認をします。はじめに訪れたのは近所同士で生活しているお二人で、互いに助け合って生活している方々でした。一人目の方は河川敷で生活するのが得意な方で、自給自足の生活を送っていました。驚いたのは、土地を耕して農業をしたり鳥などを狩ったりして食料にしているということです。前回の路上訪問は名古屋の中心地で、その時とは全く異なる生活の仕方だったので驚きました。また竹藪の中にお住まいでしたが、そこまでの道や柵、家などが一人で作ったものとは思えないほどしっかりしていて、技術力や実行力がある方なのだとと思いました。実際に河川敷で生活できるのかと疑問に思っていましたが、本人はとても元気そうで、その日の朝も焼酎を飲んでいたと言っていました。学生の我々にもどんなことを学んでいるかなどを尋ねてくれて、近所のおじさんのように明るく話してくれました。訪問する前は、都会で生活している方よりも設備が充実しておらず、より困難な生活を送っているのではないかと思っていましたが、その場所でできることを駆使して生活していました。支援をする側もその場所の特性、その人の生活力などを理解し、それに応じたサポートの仕方が必要なのだと思いました。二人目の方も同様に竹藪の中で生活していましたが、以前倒れたことがあったそうです。そのため血糖値関係の薬を飲んでいるのですが、えらそうなことをいう医者がいると、不満を漏らしていました。今後同じように倒れた場合に備えて、寝る際は竹藪の中ではなく、高架下へ移動し、お隣の方と一緒に寝るようにしております、またセンターの方から救急車が必要なくらいの状態になったら人に見つけてもらえるように近くのグラウンドに行くか、堤防まで行って助けを求めるようにアドバイスを受けていました。確かに都会と違って河川敷はあまり人も通らず、夜は真っ暗になってしまうので、もしものときにすぐに見つけてもらえない可能性があるというのは深刻な問題だと思いました。また、この方は家族といざこざがあったようで居場所を知られたくないため生活保護やアパートに住むといったことに抵抗があるようです。このような理由が支援の枷になっている場合もあるのだと知り、実際は家族には知られないといったことなど、より支援の仕組みを知ってもらうことが重要だと思いました。そのほかにも河川敷と公園などを訪問し

ましたが、アパートなどに住むことにあまり前向きではない方が多かったです。家族の問題、戸籍の問題などもありますが、今住んでいる土地から離れることを躊躇しているように思いました。また一時的にアパートなどに住むと、その間に今住んでいる場所を荒らされてしまうかもしれないため、移動することができないという方もいらっしゃいました。私もアパートなどに住むことが路上で生活することよりも必ず良いことだとは思いませんが、一時的でもいいのでアパートなどに住むことで考え方方が変わることもあると思うので、ぜひ積極的に考えてほしいと思いました。

車の中や移動中にさしまサポートセンターの看護師の経験があるボランティアの方からさまざまなことを教えていただきました。年末年始は、松竹梅という宿泊施設が使えるそうです。そこに宿泊するに当たっては個人情報を教える必要はなく、何かしらの条件があるわけでもなく宿泊ができます。以前は大部屋だったらしいのですが現在は個室で、食事もついており生活しやすい環境だと思うのですが、訪問した方々はみなさん難色を示していらっしゃいました。現状で不満がなく、わざわざ行く意味がないといった感じでした。宿泊に関するきちんとした情報が得られていないために避けているのではないかと私は思ったので、より詳しい情報を伝えることで踏み出しやすくなるのではないかと思いました。そしてこれがきっかけでアパート居住などにつながるとも思ったのでいい取り組みだと思いました。また、現行の制度の難点なども教えてくれました。以前は、その制度ではすべての路上生活者を支援しきれないとして行政とセンターが対立していたこともあったそうです。現在「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」というものがあるのですが、この法律ではホームレスを「都市公園、河川、道路、駅舎」で生活している者、としているため定義が狭くなりそこからはみ出してしまう人がいることが問題だとおっしゃっていました。また、あくまで一般に社会で生活している人々に迷惑が掛からないように問題を解決しようとしているだけで、周りに迷惑をかけていない路上生活者などに対しては支援が希薄だともおっしゃっていました。また生活困窮者自立支援法という法律もあり、生活保護の対象にならない人も支援が受けられるというものなのですが、一定の予防効果はあるものの、継続的な支援や支援できないといった場合もあり、すべての人が支援を受けられるという訳ではないようです。そのため、法律では救いきれないグレーゾーンの方々を支援するために、さしまサポートセンターのような、実情を直接判断し、制度上では支援の対象とならない人々にも支援をする存在が必要になると実感しました。

午後は生活医療相談に参加させていただきました。会場には2, 30人の方がいらっしゃって、焚火の前に集まって焼き出しを待っていました。毎年来ている方に話を伺う

と、いつもより人は少ないそうです。生活医療相談だけでなく衣服の支給や法律相談、散髪なども行わっていました。前回鶴舞で参加した木曜生活医療相談の時よりも参加した方々が支援者や知り合いの方と談笑していたため明るい印象を受けました。何人かの方にお話を伺いましたが、きちんと医療相談として話を伺えたのは一人の方でした。その方は68歳の男性の方で、以前は名古屋駅の階段で生活していたのですが、今は伏見あたりの公園で生活しているそうです。体調に関して伺うと、以前はひざを痛めていたのですが、今は問題ないようでした。お酒は飲まないと言っていましたが、たばこは一日に20本ほど吸っているため、そこが心配点でした。生活保護について伺うと、受けたいとおっしゃっていました。なぜ受けないかを伺うと、個人的な都合で入れないとおっしゃって具体的な理由は聞けませんでした。まだあったばかりの他人には話せないようなプライベートな理由だったのかもしれません。また、アパートなど雨風をしのげる場所に住みたいともおっしゃっていたので、センターの方に伝えて対応をお願いしました。改めて思ったのは、路上で生活している方々にはそれぞれにこの生活をしている原因があって、それぞれに生活保護を受けられなかったり、受けたくなかったり、今の生活を離れられない理由があるということです。そしてそれの人がより良い生活を迎えるためにはセンターの方が詳しく事情を聴き、提案をしていくという活動が欠かせないと改めて実感しました。

私は法学部で、ゼミとして社会保障について勉強しているのですが、今回のフィールドワークを通して、法律や制度などでは救いきれない人々がいるということを学びました。路上で生活している方々の多くはその事情が複雑で、法律や制度などの上に乗らず、実情が困難であっても支援や援助ができない状況が生じてしまいます。そのため、法律的にグレーなことであってもサポートすることができる存在が必要不可欠となります。実際に問題となっている場所はその地域ごとに柔軟に対応していくことが重要で、ルールなどには縛られずに自治体単位で連携して問題解決に取り組んでいくことが、路上生活者の支援につながるのだと思いました。しかしこのような対応は一時的な方法でなければなりません。これを恒常化させてしまうと、支援対象の曖昧化につながり、限りある支援が、支援すべき方々に行き届かなくなってしまう恐れがあります。そのため、より良い支援を行うためには制度を見直していく必要があり、その問題提起ができるのは実際に支援をしている方々であるため、これからもボランティア団体と行政が連携して取り組んでいくことが重要だと思いました。

ささやかなフィールドワークを通して

江崎彩乃

今回私はフィールドワークの授業の一環として、生活困窮者の方々に対する支援活動に少しだけ参加させてもらった。1回目は毎週木曜日に行われる生活医療相談を、2回目は年末に数日間にわたって行われる越冬活動というものを1日だけ体験した。

木曜生活医療相談では、19時頃に高架下の会場に集まり、炊き出しが行われている中で健康面に不安のある当事者の方々の話を聞くという活動を行った。実際にホームレスの方とお話ししているとき、私はなんだか不安で落ち着かなかった。その理由として、自ら話しかけに行くというのがこれまでの自身のホームレスの方々に対する接し方とかなり異なっていたからではないかと考えた。駅やバス停でホームレスの方に会うと、あまりじろじろ見たら失礼なんじゃないかと思い私はいつもすぐ目をそらしてしまう。そう感じるということはホームレスの方をかわいそうだと思ったり、どんな見た目をしているのか気になってしまったりしているのだろうが、それはあまり良くない考え方のような気がして、必死に見なかつたふりをしていたのだと思う。そのためこの生活医療相談でホームレスの方と向き合い相手の目を見て話すことに慣れなくて、私は違和感を覚えたのではないかと思った。

また越冬活動は、まず朝9時頃に会場である公園に集まり、そこから少し離れたところで暮らしていらっしゃるホームレスの方々に支援物資を渡しながら話を聞くというアウトリーチ活動から始まった。それが終わり会場に戻ってからは寄付された衣類の仕分け作業や昼食の配膳を手伝った。この日のメニューはパスタだったのだが、とても具沢山で驚いた。こんな鍋いっぱいの量の具を切るのはどれほど大変なのだろうと思ったりもした。お昼ご飯と一緒にごちそうになってからは、生活医療相談として当事者の方と1対1で話をし、その後15時ぐらいに解散した。

当事者の方に声をかけてみると、皆想像していたよりも明るく話してくださいって、困っていることも特にないと答える人が多かった。それぞれにきっと辛い過去や大変なことがあるだろうにすごいなと思っていたのだが、よくよく考えてみると初めて会う学生なんかに悩みはあまり話さないのでないだろうかとも思えてきた。もちろん学生だからこそ聞ける話もあるかもしれない。だが自分だってよっぽど親しくないと誰かに悩み

を相談したりしないのに、当事者の方には相談してほしいと思うのは、自身を支援する側だと思っているからこそその驕りや思い上がりなのかも知れないと感じた。ただボランティアとして活動する上でそれは当たり前に抱きうる感情だろうし、その気持ちがあることで状況が改善することもあると思うのでいいことなのか悪いことなのかは分からぬ。いいことでも悪いことでもあるのかも知れない。

また、何を生きがいとするのかは本当に人それぞれだということも再認識させられた。例えば路上訪問で出会ったある女性はきちんとメイクやネイルをして、指輪もつけていた。失礼かもしれないけれど正直かなり驚いたことを覚えている。自分がこれまでに見たり、以前参加させてもらった木曜生活医療相談で話したりした方たちに男性が多くたからかもしれないが、今まで持っていたホームレスの方のイメージと彼女とはかなり異なっていたからだ。しかし実際に話をさせてもらったり他の人からエピソードを聞いたりするうちに、メイクやネイルは彼女が彼女らしく生きる上で欠かせないものとなっているのではないかと思った。プライドとも捉えられるかもしれない。もしおしゃれをすることに価値を見出せないならば何もしないことでかなりの節約にはなるだろう。しかし、彼女にとってそれは必要な経費なのである。また、午後にお話を聞かせてもらった男性は、ギターを心の支えとしていた。原因のよく分からない体調不良のために複数の病院に通っており、うまく仕事も続けられない中で、ギターがあるから前を向いて生きていられるのだと語っていた。そのため毎日練習は欠かさず、弦もいいものを使い、定期的に楽器店に持ち込んで安くはない金額を払い手入れをお願いしたりしているらしい。お話しした日も楽器屋に持つていており返ってくるのは年が明けてからだと言っていた。これもギターに興味のない人にとっては無駄に感じるだろうが、きっと大切なもののなのだろう。この考え方方は以前先生が話されていた、猫と共に路上で生活している方にもいえるかもしれない。その方は猫に与えるエサだけは必ず自分で稼いできたお金で買うらしいのだが、それが彼にとって生きがいというかプライドというか、何か彼を支える要素の一つとなっているのではないかと思った。当事者の方にとってこれらは生活が多少苦しくなっても守りたいものであり、だからこそそこにその人の人となりが少しだけだが垣間見えるのではないかだろうか。そして、私にとってそのぎりぎりまで大切にしたいものは何なのだろうと思った。もちろんお会いした当事者の方々の生活は決して楽なものではなかったけれど、自分の中で譲れない何かを見つけてそれを大にしながら生きられるのは幸せなことのように思える。まだ出会えていないのか気づいていないのか、それとも絞り込めていないのかは分からぬが、はっきり決められないぐらい候補がたくさんある中で生活できているのもある意味幸せなのかもしれない。ま

た、午後にお話しさせてもらった男性は、自分にとってはギターだけれど、人によってはギャンブルが打ち込めるものだったりするのだと言っていた。大事にしたいものは人によって様々でありお互いに尊重することが必要だと考えていたのだが、もしそれがギャンブルやお酒といったものだった場合はどうするのが正解なのだろうかとも感じた。

この2回のフィールドワークを通して、私は本当にたくさんのこと学ばせてもらった。授業が始まる前は人見知りの自分にフィールドワークなんてできないのではないかと不安だったが、今はこの授業を取って本当に良かったと感じている。ただ本を読んだり誰かの話を聞いたりするよりもはるかに強烈で心を揺さぶられる経験だった。生身の人と接することでしか知りえないことはやはり多いのだなと実感した。また、今こうして書いている自身の考えも時とともに変化していくと思う。数年後、数十年後にこの文章を読み返したときに自分はどんなことを考えるのか、楽しみである。

冬を越えて ～各々の冬を肌で感じて～

鄭 在鴻

12月29日の朝、名古屋城駅を出て、拠点を探していたら、焚火の匂いが漂ってくる場所を見つけた。県庁などの並ぶ街で探している場所はここしかないと思った。今回、私は現在一般的によぶ家のない方々への越冬活動、炊き出し場での生活医療相談の見学、お手伝いをさせていただいた。

ここで、いわゆるホームレスという言葉を使わなかったのは、世間的な偏見や固定観念に、個性ある人々が当てはめられることに抵抗があったからである。正しい言葉選びかは分からぬが、時間をかけ悩みもした経験のうえで、ここでは、私自身がいろいろなことを悩み考えながら選んだ言葉選びをしていこうと思う。

越冬活動では、車に乗り、河川敷、名古屋駅の周りの方々の拠点を訪問し、衣服、衛生キット、食料などを配り、酸素飽和度、血圧等を測定しながら現在の生活での相談事などを聞くということをさせていただいた。いろいろな拠点を訪問しながら思ったことが3つある。

1つ目は、拠点にそれぞれの個性が表れていたことである。ここで拠点という言葉選びをしたのは、住所のある家とまではいかないが、様々な活動を行う際に、起点となる場所、心を休め安心できる場所、そして、人々との外部での活動、内部での活動を分けるものとしてその場所が存在しているように感じたからである。自分の当初持っていたイメージよりも数段上の拠点しかなく、その中には、竹細工の仕掛けもある拠点まであった。その拠点での物の置き場所、置かれ方から、その方は纖細な性格なのか、動物に対して優しい心の持ち主なのかなど個人の性格を推察することができ、内気だとかという一言では表すことのできない性格の多様性を見ることができたと思う。

2つ目は、皆さんしっかりと言葉のキャッチボールをしてくださったことだ。もちろん、訪問支援を受け入れる選択をする方にはそのような人が多いとは思うが、血圧を測る際に少し手間取っている私に、立派な医者になれよと冗談交じりに応援してくださったり、僕らの話していることに対する常に笑って受け答えをしてくださったり、何より何か一つお手伝いをしたり、物を渡すときに必ずありがとうという言葉が聞こえたことが印象深かった。世間一般のイメージや僕も先入観で持っていた頑固で不愛想な人とい

うイメージがしっかりと崩された。特にありがとうの言葉に関しては、一つ一つの物事にしっかりと返せる方は社会に溶け込み生活している方でも少ないとと思う。

3つ目は、皆さん本当にいろいろな事情を抱えている人が多かったことである。越冬支援として、年末年始は宿泊施設に泊まることができると知り、自分の、実際にフィールドワークに行く前のイメージでは、政府の施策には頼りたくないという信念をもって自分の拠点に残っているのだろうかと思っていた。しかし、それぞれの拠点を訪問しているときに気づいたのは、皆さん、自分の拠点を留守にするのが怖いという意見のもと、政府の施策にのっていないということだった。確かに、戸締りなどがされていない拠点を一定期間開けると、住みやすい場所であるほど他の人に奪われてしまうこともあるし、心無い人々によっていたずらされてしまうこともある。何より、その場所はその人の住所として確立されているわけではない。常に後ろ指をさされる恐怖が潜んでいる。拠点を回っている際に、留守の方でもラジオをつけっぱなしにしておくような工夫をされている方を見ても、家とは異なることによる拠点に対する後ろめたさ、自分の手の内に認められていない際の恐怖を感じた。また、居住地は戸締りの機能があって当たり前という先入観を自分が持っていたことに気付かされた。さらには、生活保護、年金等の支援を提案された際に、いろいろな理由を話してくださったけれど、その中でも特に家族に連絡が行くことに強い抵抗を感じている方もいた。家族のお話をする時が一番私たちに対し、視線を合わせてくださらないことなどから、かなり大きな理由として存在するのだと分かり、家族間での関係性の難しさというのも裏の事情としてしっかりとあるのだということを実感することができた。

生活医療相談では、炊き出し場で、一緒にカレーを食べながら、お話を聞いてもよいかを伺ったうえで、今の生活で健康面上の不安な点はあるか、これから的生活に対し、支援の希望等はあるかを聞き込みした。珍しい豆腐やほうれん草などが入っている栄養価の高い温かいご飯が焚き火の近くで得られているからこそ心を開いてくれた方はいるかもしれない。

その中でも気づいた点が2つある。

1つ目は、健康状態で悪いところが似ていたことである。ご高齢の男性3人ほどに聞き込みをした際に顔を見ながらお話をしていると、ほとんどの方が歯に異常をもつことを気づいた。歯に気をつかうというのは、洗面台が当たり前にあり、歯へ意識を向けられるある程度の生活の余裕が必要なのか、層が高齢化しているのが主な原因なのだろうかと考えた。深刻なのは、それにより食事をすることが億劫になり、固形物をあまり摂取できなかったり、そもそも食事の回数が1日1,2回になってしまっている点であつ

た。これでは、栄養素を十分に摂取できないだけでなく、食事による幸福感の実感、噛むことによる認知症の予防などもできなくなってしまう。生活医療相談で歯科医の方を、積極的に呼ぶ必要性があると考えた。また、多くの方は現金収入のためのアルミ缶集めの際に、自転車を漕いで、いろいろな場所へ行き、アルミ缶を拾った後、重いアルミ缶を持ち換金所へまた自転車を漕ぐ。こうして酷使した足をあまり休ませる時間や場がないことにより、足の関節の痛みが目立つ方が多いことも傾向として見られた。自分で拠点を持つ方は、ある程度、足を自由に伸ばし、寝転がったりすることもできるかもしれない。しかし、話を聞いた方には、冬は夜に行動し、睡眠は暖を取るために、日中の図書館で座って取るという方がいて、そういう方にとって寝転がったり、足を自分に伸ばすという場所は少ないのだろう。

2つ目は、いろいろな背景があったとしても、皆さん仕事はしていたいと思っている方が多かったことである。お話を伺った方の中に、極度の人見知りで、人のコミュニケーションに入るのは苦手で、アパートなどに入ったとしても出てきてしまいそうだという方いた。しかし、補助を受けるのではなく、仕事はしたいとおっしゃっていた。

なぜなのかというのは聞くことができなかったが、その時の表情は明るく、自分の生活を自分に委ねることのできる状況に対し、達成感や安堵、楽しさがあるのではないかと感じた。よって、その補助として、あまり人と関わらなくてもできる仕事を提供したり、コミュニケーション力を上げるお手伝いをしたり、自分から仕事を選べるよう基礎学力を上げるサポートをもう少しはやく行うなどを思い付きはしたが、過程として必要だとしても、本人たちが望んでいないことを押し付けてしまうというのは相談に来てくださった人々の望むものとは異なると考えた。

全体の活動を通して、外に出てお話を聞いているときに、自分の知っている世界がすごく狭いことを実感させられた。お話に出てくる生活困窮者を支援する法律や就業訓練をサポートする行いなどについてほとんど知らなかったときはかなり驚いた。

また、これから書くことは鳥游がましいと思い、書こうか迷ったが、医師の卵としての周囲からの期待、関心も考え、書くこととする。将来自分が医者としていろいろな層に接するときにはいろいろな立場に挟まれてしまうと私は予想している。多くの人々の健康安全を考える医師として、病院の中で生活するとき、日常生活へ患者の方を送り出すときには、人々と関わることが苦手で大勢の他者をあまり気にすることができず、極端に自分の悲しみや怒り、痛みなどの外部への発露、それに対する周りからの共感や、適応を求めてしまう人々にも、ある程度の強調をお願いし、諭さなければならない。しかし、そういう方々に対しても、一人一人の健康を考える医師として、患者にしっかり寄

り添い、理解者として接する必要がある。このような温かさと冷たさの行使をしなければならない者が医師という人間だと私は考えている。表面上だけの同情、寄り添いをし、押し付けがましくお願いをすることのないよう、裏の事情を実際の目で、肌で感じることは力を持たされる責任あるものとしての、義務だと思った。

越冬活動

萩原くるみ

私は11月9日に木曜生活医療相談、12月29日に越冬活動でアパート訪問、生活医療相談に参加しました。そこでの体験や考えたことなどを述べていきます。

アパート訪問では、生活保護などをを利用して路上生活からアパート生活に移行した方々に福袋を渡しに行きます。アパート生活に移行すると、困っていることを相談する機会があまりなくなってしまったり、孤独になりやすかったりという問題があるので、福袋を渡すついでに少しお話もします。福袋には生活のしおりや日用品や鏡餅、お菓子などが入っています。生活のしおりには、病気になったときどうしたら良いか、各種役所の手続きの説明、借金をするとそれは収入とみなされて保護費からその分を引かれてしまうこと、借金は最後の返済から5年で時効になること、住み込み就職をすると終わってからまた路上生活に戻る可能性が高いので避けること、など私の知らなかつたことがたくさん書かれていて面白いなと感じました。

訪問者が多すぎるとご迷惑となる可能性があるので、2人組に分かれて3日間かけて訪問します。私は鶴舞線の東側の沿線に住む方々の訪問をしました。4件訪問した中で2件では直接会うことができ、元気に仕事をしていると聞いて安心しました。直接会うことができない場合には、部屋のドアノブに手紙の入った福袋をかけておきます。しかし、アパートによっては部屋の前まで行くことができず、ポストにも入らないので福袋を渡すことができなかつた方もいて、少し残念に思いました。

私と一緒に回ったボランティアさんは、普段は路上で生活をしている方に仕事を紹介する会社で働いているそうですが、路上生活の方やそこからアパート生活に移行した方に直接会うことはなかなかないと言っていました。ボランティアさんの知り合いの医師が路上生活の方に無料で診察をしていたことがアパート訪問活動参加のきっかけになつたそうです。

午後からは拠点に戻り、生活医療相談をしました。年末年始は役場等の相談窓口が休業となってしまうので、相談にも力を入れています。ただし、自主的に相談をする方は限られていたので、私は賃貸で暮らしているという70代後半の女性に話を聞きました。以下ではAさんとします。

Aさんは2年ほど前から炊き出しに参加するようになり、木曜生活医療相談の無料診察で血圧を定期的に測ってもらっています。若い頃は低血圧でしたが、最近では最高血圧が200を超えることもあるそうです。血圧が高すぎるので、病院での診察を勧められ、病院で血圧を測ってみると、なんと正常値が出たことから、高血圧の背景には炊き出し場所での人間関係のストレスがあるのではないか、と医師に診断されたと言います。

炊き出しに集まる人はだいたい顔見知りでグループとなっています。そして、話す内容は愚痴に始まり、だんだん悪口や根拠の無い噂になっていくそうです。Aさんは、「若い頃は周りの人に恵まれていて、悪口を言う人なんていなかった。この歳になってこんな思いするなんて信じられない。」と何度も繰り返していました。実際にAさんと話しているときにも、炊き出しが早くに無くなってしまったことに対する不満の声が聞こえてきて、Aさんは、「文句を言うなら早く来れば良いのに。」と嫌がっていました。炊き出しに集まる人と一緒に話していると気が滅入ってしまうので、悪口を聞こえないふりをして流すことも多いけれど、それにも疲れてきたそうです。また、他の人と新しく話してみようとすると、事実かは不明ですが、「あの人はお金をする人だ。」などと言われたことがあり、他のグループに話に行くのも面倒になってしまったと言っていました。

私の中のイメージでは、元々の家が裕福ではなく十分な教育を受けられなかったり、幼少期に家庭が荒れていたことで精神的に不安定になってしまったりすることが背景にあって、路上生活になってしまう方が多いのかと思っていましたが、Aさんのこれまで人生についてのお話を聞くと思っていたよりも共感する部分が多く、Aさんは、私が炊き出しに集まる人たちに対して抱いていたイメージとは違った育ち方をされていたのだと感じました。

そして、炊き出しに集まる方の大半は高齢です。これは、定年で仕事を退職するものの、老後2000万円問題と言われているように(これは無職の夫婦をモデルケースとした場合ですが)、年金だけでは生活に必要なお金が足りませんが、身体能力が衰えることで雇われづらくなり、満足に働くのが難しいなどの理由が考えられます。

また、今の高齢者世代の女性は結婚して専業主婦になるという生き方がマジョリティであり、男性と比較して高齢になってからの年金や退職金が少なくなるので、炊き出しに集まる方は男性より女性が多いのではないかと考えていましたが、実際には女性は2~3割ほどしかいませんでした。さらに、路上生活をしている方に限定すると女性はなんと5.7%ほどでした。(厚生労働省)この要因について少し調べてみました。まず、路上

生活をするようになった理由について見てみると、男性で1番多い理由は「仕事が減った」、女性で1番多い理由は「家庭内のいざこざ」です。さらに、「結婚している」または「結婚したことがある」割合は男性で32.7%、女性で62.9%となっており(厚生労働省)、女性は離婚を機に路上生活を始めた方が多いことが窺えます。これらから、1つ目の要因として、離婚後に子供がいる状態で路上生活をする場合には、母子生活支援施設などが利用でき、支援を受けやすいということが考えられます。2つ目の要因としては、女性の方が男性と比べて非力であることや、性被害に遭いやすいということもあり、人目につかないところでひっそりと暮らしているので、統計上の数値に表れてこないということが考えられます。

木曜生活医療相談と越冬活動全体を通して感じたのは、炊き出しに来る方や、路上生活をしている方は良い意味で「普通」だということです。以前は、炊き出しに集まる方に対して、変わっている人が多く、あまり近づかないほうが良いというイメージを抱いていましたが、実際に話してみると良い意味で印象が変わって、とても貴重な経験になりました。

フィールドに出て初めて気づいたこと、考えたこと

吉井 初穂

私は今回、越冬活動に参加することができなかったため、1月14日にあったアウトリーチ活動に参加しました。アウトリーチ活動では車に乗り何ヶ所か路上で生活されている方を訪ねて、カイロや食べ物を配って回りました。

はじめに訪ねた方は70代くらいの女性でした。印象的だったのはその方の服にはマジックペンでデザインの様に単語や模様が書いてあったことです。またリングも身につけていらっしゃったので、おしゃれに気を遣っている方なのだろうという印象を受けました。その方の住まいも見せていただきましたが、段ボールにスケジュール表の様なことが書かれていてペンでカラフルに色分けされていて、装飾のようにも思えました。その住まいは雨風を完全に凌ぐことができない場所にあり、雨で体が濡れてしまうこともあるそうです。それならば自治体が用意している施設に移った方が良いのではないかとも思いましたが、そうしない理由には住み慣れた今の住まいを手放したく無いという思いもあるのかもしれません。ボランティアさんに血圧を測ってもらい、高血圧のため薬を貰った方がいいという話や最近吸っているタバコの種類の話をしていました。2人目の方は60代くらいの男性でした。訪問したときはちょうど空き缶集めをされているところでした。空き缶を一つ一つハンマーで潰して袋に詰めていました。空き缶は1キロで150円程度になるそうです。潰すのは手間はかかりますが体積が減って沢山運べるため潰しているそうです。カイロと食べ物のほかに空き缶集めに使うのだろう軍手も喜んで受け取っていました。3人目の方は70代くらいの男性でした。人通りの多い駅の出入り口の前に座っていました。周りがオフィス街なこともあります。お弁当や生活用品の差し入れも時々あるそうです。よく目につく場所なので過去にはYouTuberがインタビューした様子をネットにあげられたこともあったそうです。しかし、その動画で得られる収益は1円も貰えないというのはYouTuberに利用されたようにも思えて残念に思いました。また、以前さしまサポートセンターの木曜生活医療相談にも参加することができます。その日は60代くらいの男性とお話しさせてもらいましたが、その時が当事者の方からお話しを聞く初めての機会でした。その方は、お父さんの介護と仕事の両立が困難になり仕事を辞めて、家賃も滞納してしまうようになったので住んでいた

家を出て路上生活を始めたそうです。私は今まで路上生活をしている人は借金を返せなくなって取り立てから逃げているのではないかとかアルコールやギャンブルの依存症になって働けなくなったのではないかといったマイナスの偏見を持っていました。だから親の介護の為に仕事を辞めた結果だということはとても意外で、これまで自分がとても偏ったものの見方していたことを痛感しました。それと同時に何一つ悪いことをしていなくても、むしろ介護のために努力している人であっても貧困のために路上生活を強いられる残酷さを目の当たりにしたように感じました。

アウトリーチ活動に参加して疑問に思ったことは、どのように当事者の方に出会って活動をしってもらうのだろうということです。今回訪問した場所ではどの方も1人で生活されていました。名古屋市という広い地域の中で当事者の方を一人一人を探すのは簡単ではないと思います。また、当事者の方に会えたとしても、活動のことを知つてもらい支援が受け入れられるにはまた大きな壁があると思います。ボランティアさんからお聞きした話では、以前スーパーマーケットの前のベンチで座っているところを度々見かける方がいたそうです。支援を必要としている方なのではないかと思って、軽く挨拶程度にお話ししたそうですが、その時は母を待っているだけだと返され、その日以来いつもいたベンチでは見かけなくなってしまいました。近くの同じようなスーパーへやその方がいそうなところを何ヶ所も探すと、場所を変えて別のところで同じように座っていたそうです。前のスーパーのベンチよりもあまり居心地は良さそうでは無く、ボランティアさんは声をかけてしまったために申し訳ないをしてしまったとおっしゃっていました。善意でしたことでも時にはその人のためにならないこともあります。住む家がある人は家にいても自分はそこにいる権利があると言うことができますが、そうでない例えば路上で生活されている方は、いつその場所を追い出されるかわからない恐怖や周りへの罪悪感などがあるのではないかと思いました。だから、声をかけられたら怖いと思うしさらに支援を受けるのは迷惑をかけているようで申し訳ない、支援を受けたくないと思うのではないかと感じました。実際に今回のアウトリーチで訪問した方の中にも食べ物やカイロを持ってきましたと伝えると、要らない、もう訪ねて来なくていいとおっしゃる方もいました。そういう方でも何度か会いに行って信頼関係を築くと受け入れてもらったり、こんな物持ってきたんですけど必要ないですかと聞くとそれだったら欲しいと言われることもあるそうです。もしも関係が悪くなってしまうと、孤立して一番苦しくなるのはその当事者の方一人一人です。今はまだ働いて自分である程度稼ぐことができても、歳をとって段々体が悪くなって生活を維持できなくなつた時に頼れる先がないというのはあまりにも酷です。そのため、しつこくしたり善意の

つもりが嫌なことをしてしまうと信頼関係が崩れて嫌われてしまわないように、ボランティアさんたちが程よい距離感でいるのを心がけているように感じました。

最後に、将来自分がどのようにこの経験を活かすことができるか考えました。私は今医学を学んでいて将来医者になりたいと思っています。医療と福祉は密接に関係しています。当事者さんが内科に診てもらいに行ったところ、話を聞いてもらえずに精神科にまわされ嫌な思いをしたのでそこに連れて行ってくれた支援団体のことでも信頼できなくなって関係がきれてしまったという話を聞きました。医師は患者さんに精神的な疾患があると気づいたとしても、できるだけ患者さんの希望するかたちになるように話しを聞ける必要があるし、信頼関係を築く努力のできるようになりたいと思いました。

人と人とのつながりの温かさ

水谷 倫乃

1. 木曜生活医療相談に参加して

私にとって、木曜生活医療相談が初めて当事者の方々やボランティアの方々とお会いする機会でした。木曜生活医療相談では、当事者の方々にお話を聞き、体調などをうかがって、必要であれば医師につないだり、行政につないだりする相談を行いつつ、当事者の方やボランティアさんとお話をさせていただきました。

まず現場に行ってみて、テントで作られたお家があり、たくさんの方が自転車をお持ちで、正直に言ってしまうと、驚きました。私はこれまで勝手に当事者の方々は段ボールのお家に住んでいると思っていたからです。確かに住まいはそれぞれで、椅子で寝ていらっしゃる方もいらっしゃいましたが、扉があるお家だったり、猫を飼っていらっしゃったり、ご自分なりにこだわられていると感じました。

生活医療相談には合計2日間伺わせていただきました。その中で、特に印象的に感じたことは、意思疎通がスムーズな方も多く、「この学生に何か教えてあげようかな」というように接してくださいり、私にとっては近所の優しい人と何ら変わりがなかったことです。その上で、自分の生き方、やり方にこだわりをもっていらっしゃる方が多いということです。当たり前ですが、何か事情があって路上生活をしている方も同じ人であり、同じ国に住んでいる方々なので、何も怖くはないはずです。ただ、このように思ったということは、生活医療相談に参加させていただいて実際にお話させていただくまで、私のどこかでまだ当事者の方々を特別視してしまっていた部分があったのだろうかと思いました。

また、私にとってこの生活医療相談に参加させていただく中で大きなハードルだったことがあります。それは、相手の名前や生年月日を聞くことです。これらの項目は何度考えても相手のテリトリーに踏み込むことのように思えてしまい、1日限りの学生に個人情報は言いたくないのではないだろうか、この質問によって相手を不快な気持ちにさせないか、ということを考えてしまい、聞き初めにとても戸惑いました。後述する越冬活動の中でも生活医療相談には参加させていただいたため、これまでの中で5人の当事者の方にお話を聞かせていただいたのですが、私からお名前を聞くことができた方は1

人もいません。自分の中ではいきなり隣に行ってお名前を聞くのも少し変な気がしてしまうし、かといってお話の中で突然聞くのもタイミングが分からず、結局分からぬままお話を終える、ということばかりでした。私の中ではお互いにとっての安心感や信頼感はこの活動を行う上で不可欠だと感じ、それは、当事者の方の中に入って世間話をしたり、一緒にこの先のことを真剣に考えたりしていくうえで芽生えるものであり、それがあつてやっと私にも名前や生年月日を聞く権利のようなものができるのかな、と思つてしましました。もちろん、当事者の方々がどのように思っているかはわからないです。そして、私がここで分かったように書くことも違うと思いつつ、感じたことを書かせていただきました。

お話した当事者の方の1人で、「あなたたちとは遠い世界でしょう？みんな色々なことを思っているから、色々話を聞いてみてくださいね」とおっしゃっていた方がおり、この言葉を聞いて、自分の生活に誇りを持っており、生活を知つてほしい、と思っていて、自分の生活を好きでいることはとても大事なことだと思うので、素敵だなと思いました。

2. 越冬活動に参加して

<河川敷訪問に参加して>

河川敷訪問では、私含め5人で看護師のボランティアさんが運転してくださる車で河川敷まで行き、当事者の方とお話をしたり、衣類や食べ物、越冬活動と生活保護に関する資料などを当事者の方にお渡ししたり、血圧や体温の測定をさせていただいたりしました。

1番始めに伺ったお家は、つくりがとても印象的で、日本庭園の玄関につながる道のように竹細工がはられていたり、煙突があったり、畠があったりとこだわって作られていることが分かり、お家に関するお話を聞かせていただきました。また、どのお家も、木曜生活医療相談のお家よりもさらに立派なつくりのお家も多く、キャンプをしているようになっている方の家が多かったように感じました。

木曜生活医療相談の時にも感じましたが、どの方もしっかりコミュニケーションを取れる方ばかりで、食糧や健康用品などはありがとう、とありがたそうに受け取っておられる方が多かったように感じました。

当事者の方とお話している中で、私にとって特に印象に残った言葉があります。それは、「偉そうな医者になってはいけないよ」という言葉です。私と一緒にボランティアに参加したメンバーの中に医師になる勉強をしている学生があり、彼に向けられた言葉

でした。私に向けられた言葉ではなかったものの、私の印象に残ったのは、私が看護学生であり、この時に、決して偉そうな看護師にはなってはいけないな、と思ったからだと思います。看護師のボランティアさんもこれを聞いて、「偉そうな医師は医師のイメージとして、許容する人も多いです。一方で、偉そうな看護師は許せない人が多いです。」とおっしゃっていました。医療者は人に寄り添う仕事であり、看護師は患者さんの身の回りのことのお手伝いもするため、患者さんと近い場所で看護をすることができます。そんな役割を持つ看護師がもし偉そうだったら、そして、「看護してあげている」という気持ちでいたら、その看護師に対して不信感を抱く人は多いのではないか、と思います。そう考えたら、この越冬活動のボランティアと看護師の仕事は通ずるところがあるなども思いました。

前述の通り、私は当事者さんの血圧を測らせていただくことがあったのですが、腕がとても細く、きちんと食べることができているか心配になりました。細くても温かく、肌も私の祖母と同じ触り心地で、そこには少し安心しました。

河川敷訪問で伺った当事者の方の中に、アパートに入りたくない理由に、弟に連絡がいくから、とおっしゃっていた方がいらっしゃいました。どんな理由で河川敷の生活を始めたかはわかりませんが、どれだけ遠く離れても、今何をしているかわからなくても、弟のことを大事に思っており、さらに、弟に兄としての自分が今河川敷に住んでいることを知られたくない、というプライドのようなものもあるのだろうかと思いました。

看護師のボランティアさんは、当事者の方の健康に気を使いつつ、たくさんお話をし、だめかもとわかっていても必ず生活保護やアパートでの生活を打診し、年末だけでも松竹梅（行政が用意した一時宿泊所）に入らないかと聞いてしていました。これを見て、情報がないことはその人を取り残すことに繋がるから、嫌がられても、断られても、何度でもいってあげたほうがいいのかなと思いました。

私は看護師のボランティアさんに同行させていただいたため、このボランティアさんの行動や言葉、姿勢からも感じることがとても多くありました。看護師のボランティアさんは当事者の方の目をじっと見て、目線を合わせながら少し斜めのほぼ対面で当事者の方とお話ししており、これは、圧をかけすぎないように、でも相手のことを真剣に考えていることが伝わるようにだろうかと思いました。また、看護師のボランティアさんは血圧測定時に当事者の方の手を握ったり、腕をさすったり、なんらかのかたちで触れてあげていることが多いように見えました（ほとんどの当事者の方に対して行っていました）。誰かのぬくもりで安心することは実際に多くあると思います。看護師のボ

ランティアさんがそれを考えてのことを行っていたかは分からぬが、触れても大丈夫な関係になったときにはスキンシップも大切だろう、と感じました。ただ、「触れても大丈夫な関係」の線引きはとても難しいと思っています。自分が十分に相手との関係ができたと思っていても、相手はそうではないかも知れぬですし、安心させようと思ったスキンシップによって相手に恐怖心や不信感を抱かせてしまうかもしれません。私はそれがとても怖いです。身体の向きや視線に関しても同じだと思っています。じっと見つめられることが嫌な方もいるでしょう。それでも相手に不信感を抱かせず行動することができる看護師のボランティアさんは、簡単な言葉になってしまいますが、「プロなのだ」と感じ、「私もいつかこんな人になるのだ」と思いました。さらに、言葉に関して、看護師のボランティアさんはまずは口調がとても柔らかく、聞いているだけで安心できる、でも柔らかくて優しいだけではなく、時には冗談を言ったり、一緒に笑ったりして、終始和やかな雰囲気を作り出していました。そして、今思えば、看護師のボランティアさんから、「～しよう」という言葉は一度も聞かれなかつたと思います。生活保護の提案をするときも、アパート居住の提案をするときも、「～してみない?」「～はどう?」というかたちの話しかけだったように記憶しています。これにより、当事者の方も何かを強要されている、とは感じなくなり、この人は自分のことを思って提案しているんだ、という気持ちでお話を聞いていらしたのではないかと考えました。これらの行動を看護師のボランティアさんがすべて意識して行っていたかどうかは私にはわかりません。もしかすると計算しつくされた行動だったのかもしれません、私が見ていた中では、「相手のためになりたい、安心させたい、喜ばせたい、力になりたい」、と思ったときに、これまでの経験が重なると、自然にできてしまうものなのかもしれない、と思い、私もそこに達するような人になりたいと思いました。

看護師のボランティアさんが当事者の方に、活動の前日に急遽亡くなってしまった方の訃報をお伝えしてから、「そんなこともあったから、本当に気をつけてね」とおっしゃっている場面が印象的でした。人生何があるかわからないですし、もし倒れた時に近くに誰もいなければ助けてくれる人はいません。それをわかってもらうべきだと感じました。一方で、これを書いている私も人生いつ何があるかわからないですし、気づいたら倒れている可能性もあります。自分で自分の危険を察知して周りに知らせる、という簡単に見えて簡単ではないことができるよう、当事者の方に対してはお住まいを訪れて話す中で小さな不調も見逃さないことやいつもの様子を分かっていることが最大の支援になるのだろうかと考えました。

<生活医療相談に参加して>

生活医療相談では、木曜の生活医療相談と同様のことを越冬活動の最中に行いました。私は、2人の当事者の方にお話を伺いました。

・1人目の方→首を振ることと、ほぼ単語のみで質問に答えてくださいました。自分からはあまりお話しされませんでしたが、間があっても全ての質問に答えてくださいました。考えながらお話してくださって、途中くらいから少し嫌そうかなという雰囲気が見られたため、「お話を聞かせていただけてありがとうございました」、というかたちで終わりました。15分ほどお話をしたと思います。質問と答えの間に間がかなりあったため、答えの後すぐに質問だと、質問攻めにしているようでよくないかなと思い、ゆっくりしたペースでお話をしたが、今思えばその間に相手が気まずく感じていたかもしれないと思っています。

・2人目の方→「お隣いいですか？」で始め、最初の5分ほどは何を聞いてもほぼ反応がなく、身体も私の方ではなく斜めの逆方向を向いていらして（質問の間に少しずつこちらを向いてくださったが）、お話をなさっても口の中で何かつぶやく感じだため、「あまりお話をたくないのかな、もう終わろうかな」と思っていました。その後、お住まいの質問をした際だったと思いますが、急にこちらを向いて今まででは考えられない勢いでお話をくださり、その後20分ほど話していました。最後は、生活医療相談のボランティアの方が「締めやります」と呼びに来ていただいたところで打ち切りとなりました。今は違う場所に住んでいるけれど、昔は越冬活動会場で野宿をしていらして、「あそこにテントを張って暮らしていたんだ」、というお話をや、「(野宿生活を始めてから) どこかの社長さんが車とお金を出してくださって、日本全国を旅行した」、というお話をや、「とこやを越冬活動のときにしてくださっていた人とも仲が良く、一緒にお酒を飲んだ。とこやには毎年いっていた」、というお話を聞かせてくださいました。他にも、「この辺は夏になると螢が出る」というお話をもしてくださいり、ほとんどのことが昔のお話を今話している場所に住んでいたころのお話をでした。お住まいのお話をしたときに何かがきっかけになって思い出があふれ出てくるのを間近で見た気がしました。お話をしている最中は私の目をしっかりと見てすごい勢いでお話をくださり、お話を聞いて楽しかったです。1つの話題が終わったらまた次の話題、という風につながっていって、たくさんお話をいただけるようになってからは、私から新しい話題を提供することはありませんでした。

3. まとめ

当事者の方々は、人間関係や、人付き合いなど、なにかを理由に野宿になってしまう方が多く、なるべく人から離れて生きていきたいと思っていると勝手に思っていました。だからこそ私たちが触れていい部分も少なく、バリアが分厚いのだと思っていました。しかし、越冬活動に参加しておられたり、河川敷におられた方々のお話を聞くと、「人が恋しいから来てるんだ」、とおっしゃっていたり、家族を想うことをおっしゃっていたり、ボランティアの方々と普通に話していたりと、むしろ人とのつながりを求めるような言動が見られて少し驚きました。そして、住む場所が少し違っても、人とのつながりを求めてしまう私と感じていることは同じだと感じ、勝手に少しうれしかったです。人を信頼できない場合も多いが故に、信頼した人、場所、組織への気持ちは強くなっていくのかなと感じました。寒い冬を越すために、そして年を超すために、越冬活動はなくてはならない場所で、人と人とのつながりを生んでいるのだろうと思いました。また、ボランティアの方々も、ただ何かを配布する、支給する、ということをしながら当事者の方と対等にお話をていらして、そのようにお話ができたらいいなと思いました。そして、ボランティアが当事者の方から学ぶことも多く、ある意味どちらにとっても有意義な時間がすごせる良い空間になるのだと思いました。ボランティアの皆さんや、当事者の方々を見たり、お話を聞いたりして、私が見ている世界は本当に小さくて、やっぱり何も見えていないのか、と強く感じました。「貧困」、という壁のようなものをなくした先には新しい世界があって、たとえ生活が苦しくても、自分の暮らしに誇りをもって（もちろん期せずして路上生活になってしまった方もいらっしゃると思いますが）生活している方をたくさん見ることができました。ボランティアのみなさんもそれを分かっていて、そのうえでホームレスの方々に安心して暮らしてほしい、と考えている方が多いように感じているからこそそのあの声のかけ方であり、あの対応なのかなと感じました。

活動に参加させていただいたて、看護師になりたいと思っている私として感じたことがあります。病院のなかにいても分からることはたくさんあって、病気になって病院に来るまでの経緯や想いは人それぞれだから、今、その病気だけに向き合うのではなく、その人の今まで、そしてこれからにもしっかりと向き合うことが必要だということです。ただ、今の病院のシステム的に、ひとりひとりの話をじっくり聞いて…というよりは、流れ作業で、ということになってしまっているところも多いと思うので、生活医療相談の最後の締めの会のように、患者さんのお話を聞かせていただく人たちの中でも情報共有が大切だと感じました。

医療だけでは治らない病気は多くあります。病気は身体だけでなく、心もむさぼっていくからです。相手のこれまでとこれからにしっかり向き合って、人と人とのつながりを作っていてける人になりたいと思いました。

それぞれの価値観に触れて

林本 愛穂

「何か困っていることはありますか」

「今は困っていないよ」

このような会話は、路上生活を営む方々に対して行われている生活医療相談および路上訪問活動に、ボランティアとして参加させていただいたなかで度々見聞きしたやり取りである。この「困っていない」という言葉に、私は深く考えさせられることとなった。

当事者の方々にお話を伺うため向かったのは、様々な支援団体によって設営された炊き出し会場である。そこには食事の提供を待つ長い行列ができていた。その光景を始めて見た私は、まず“この日この場所でこの時間に炊き出しがあることを知っている人々が、この地域にこれほどたくさんいる”という事実に驚いた。以前会場付近を通り過ぎた際、フェンスに干されている衣類を見かけたことがあったため、そこ(周辺の高架下)で暮らしている人が存在しているという認識はあったが、炊き出しの列に並ぶ人々の数は私の想像を超えるものであった。炊き出し会場で彼らは、ベンチや花壇の縁に腰掛け、受け取った容器を手で持ちながら食事をとっており、私たちはスタッフの方とともに食べ終わった方から体調の変化や悩み、どのような生活を送っていたまたは送っているかなどを聞いてまわった。冒頭の「困っていない」という発言を最初に聞いたのは、寒空の下、好みや気分などの個人的な意思が反映されたものではない食事で空腹を満たす様子を見た直後であったため、私はそれをどうしても鵜呑みにすることはできなかった。

しかし、彼らの持つ背景を聞いていくうちにその捉え方は少しづつ変化していった。始めにお話をしてくれた方は、父親の介護と仕事が両立できなくなり、それ以来職を失った状態が続いていると私たちに教えてくれた。彼は地べたではなくベンチで眠ることさえできればいいと言い、特に現状の改善を求める素振りは見せなかった。彼の他にも、以前に生活保護の申請が通らなかった経験があるため、もういいと諦めている方や、捨て子だった経験があるため、高架下に何となく落ち着きを感じている方などのお話を聞いて、どの当事者もそれが明確な事情を抱えて路上生活を送っているという

ことを知った。失礼ながら私は、路上生活者になってしまった理由について、単に働きたくないから、他者と関わるのが面倒だから、貧しい家の生まれだからなどの文言を想像していた。しかし実際はもっと複雑な背景があり、彼らは選びたくてその道を選んだのではなく、そうならざるを得なかったという現実に、はっとさせられた。

一方、聞き取りや観察を通して、その生活は決して十分なものとは言えないものの、彼女はある程度満足しながら生きているということも分かった。会場では、ボランティアの方や当事者の方同士での会話を楽しんでおり、あらゆる方向から笑い声が聞こえてくる。確かに、気の知れた人と定期的に会え、温かい食事を誰かと一緒にとることができることの機会は、当事者にとって心地良い空間となっているのだろう。

雨風や騒音を遮断できる建物で、作りたての料理を食べることや、暖房器具で暖をとること、湯船に浸かること、柔らかいベッドで眠ること、家族と会話することなどが当たり前のようにできている私には、屋外で暮らしているというその事実に対し、どこをどう切り取っても彼らは“困っている”というようにしか感じ取れなかつた。しかし活動を終えて、彼らの「困っていない」は、路上生活を営む以前の境遇と現状を比較した回答で、必ずしも強がってボランティアの声かけを受け流しているわけではなかつたのではと思えるようになった。私と彼らの異なる点は、家やお金が「暮らしの快適さ」に占める割合、言い換れば、家がないことやお金がないことに対する考え方方が違うということだけなのかもしれない。彼らの「困っていない」という発言が100%嘘ではないだろうという気付きは、私の中で大きな発見であった。

相談以外にも、越冬活動では衣類の仕分けや配膳のお手伝いをさせていただいた。前者は寄付として届いた衣類を種類やサイズごとに分類するもので、後者は盛りつけられた料理に箸を添えて当事者の方々に直接お渡しするという内容であった。どちらの活動にも共通して驚いたことが2つあり、それは元当事者の方や精神障害を持った方が働いているということと、はっきりとしたルールが決められているということである。

1つ目に関して、淡々と作業をこなすスタッフの方が急に怒鳴り出すこともあったが、越冬活動が元当事者の方や精神障害を持った方の社会参加に繋がっているということに偉大さを感じた。

また2つ目に関して、施設へできるだけ多く輸送するために分けたものを段ボールに詰め直したり、人数把握と混雑緩和のために10個作成したら列を開放し10人に渡したりするという決まりがあった。彼らはその秩序を守っており、それを乱す人には注意していた。この様子を見て、私は会場にコミュニティが形成されていることを実感した。

衣類の分類や食事の提供を終えた後、ある男性の方が「相談したいんだけど」と声をかけてきた。法律相談の開始時刻前で弁護士の方は席を外していたため、私が「専門的なことは伝えられませんが、お話を聞くことならできます」と答えると、じゃあ聞いてと言われそのまま生活医療相談を進めることとなった。その男性は芸能界や政治の話題から話し始めると、徐々に表情が和らいでいき、途中からは「どんな質問にでも答えるよ」という姿勢で、自身の生活歴を詳細に打ち明けてくれるようになった。どれだけ本当のことを話していたかは計り知れないが、初めて会った人に心を開いていく状況に立ち会い、隣で聴き手になることだけでも彼らの力になれたことに喜びを感じた。彼が初見の相手に踏み込んだ話をしてくれたのは、これまでにボランティアの方々が築き上げた信頼関係によるものであると考える。この経験からは、本当に困ったときに相談できるよう、普段から巡回して声をかけ続ける活動のおかげで、当事者の方々が話したいときに話せる環境が整備されており、その存在を彼らが認知していることの重要性を実感した。

生活医療相談に参加する1週間ほど前、私は教育支援団体とともにバングラデシュへ向かった。経済格差の大きいその国で私は、四肢欠損のある男性や、小さな子どもを抱える女性が物乞いをする様子を何度も目撃した私は、その光景を前にただ目を伏せることしかできなかった。それ以来ずっと無力感を感じていた私は、「金銭的な援助をすることも、行政のシステムを変えることも、臨床心理士のようなカウンセリングもできない私が現地に行って、果たして何ができるのだろうか」と不安に思っていた。しかし会場では、これまで他のボランティアさんには口を開いてこなかったことを、初めて出会った何の資格も知識もない私に話してくれる場面があった。今後の支援に関わってくる情報を聞き出すきっかけになれたこの出来事は、私でも力になれることがあると思わせてくれた。また、当事者の方々が「困っていない」と言う様子からは、必ずしも「力になってあげなければならない」と気負う必要はないということも学んだ。彼らが常に助けを求めているというのは私の思い込みで、そこに「何かしてあげる」という態度は余計なお世話であるように感じられた。この活動で得た学びを忘れぬよう、今ある生活に感謝して学業に努めていきたい。

人とのつながりと居場所

古莊花和

はじめに、年末のアパート訪問について経験したことをまとめようと思う。アパート訪問に行く前に、その目的は、アパート生活者にささしまサポートセンターが見守っている、困ったときに相談しようと思い出してもらえるようにアピールすること、そのことがアパート生活者さんが社会へのつながりをもつことにつながるとボランティアさんから説明を受けた。例年、アパートに訪問しても人が出てくることは多くはないようで、インターホンで反応がない場合はドアノブに掛けて帰るように言われた。紙袋を置いてくるだけでいいのか、安否確認のためにも直接会った方がいいのではないかと疑問に思った。福袋という支援物資のやりとりだけで社会のつながりがあるように思えなかつたため、1人で寂しい当事者さんの話をたくさん聞こうといった心意気でアパートに向かった。

4軒の住宅に訪問したうちの最初の一軒で、住さんに会うことができた。私が初めてで緊張していて一步引いてしまったため、住さんとほとんど関わることができず、ボランティアさんとのやりとりをほぼ聞いている形になった。挨拶した時点で住さんに警戒されているように感じた。ボランティアさんは、最近どうですか、お変わりありませんか、という聞き方をしていた。いただいたお返事はぶっきらぼうで淡々としていた。ボランティアさんは、よっぽど話したいことがあるひとしか大丈夫としか言わないので、本当だったら違う声かけをするべきかもしれないね、とおっしゃっていた。もし次私がお話しする機会があったらどうやって話すべきか考えていた。ただただ生活のことを見き出したいのならば、抽象的で曖昧な質問ではなく、具体的な質問、3食何を食べているか夜眠れているかなどを尋ねればやりとりができるかもしれない。

しかし振り返ると、アパートに住んでいる方に私のような初対面の小娘に何がわかるのかと思われるはずである上に、ボランティアで物資を支援する側というある意味うえの立場になってしまっているという後ろめたさ、ささしまサポートセンターの存在をアパートの住さんにアピールするといった当初の目的を考えると、干渉しそうない、住さんの生活に踏み込みすぎないようにするべきとも考えられる。本当に困ったことがあった時に頼ってもらえるような近づきすぎない距離感でいいのではないか。

私は1人のボランティアさんと一緒に訪問したのだが、そのボランティアさんとのお話を通して、人の孤独と居場所について考えさせられた。そのボランティアさんは、生活の困りごとの相談を受けて必要があれば生活保護につなげるお仕事をしているそう

で、そのお仕事を始めたきっかけが東日本大震災で被災した経験だったとおっしゃっていた。東日本大震災では、被災して住むところがなくなってしまった人に対して、仮設住宅が用意された。今まで住んでいた地域で築いた人間関係がない、慣れない場所でいきなり生活が強いられる人もいた。そんな中で周りの人とコミュニケーションが取れず孤独死してしまう人がいたことから、生活に不自由がある人に寄り添いたいと思ったのだそうだ。私は恥ずかしながら仮設住宅の孤独死の問題を知らなかった。被災した人には住宅が用意してあればよい、そのさきにある生活を考えたこともなかった。仮設的に用意された住まいが必ずしもその人の居場所になるとは限らないことに気付かされた。

居場所とは、国語辞典によると、“人が世間や社会の中で落ちつくべき安心できる場所”である。物理的に住んでいる場所ではなく、精神的な心の拠り所となって初めて、住まいが居場所になりうる。人間は、社会とのつながりの中で、自分の居場所を求めて生きているのではないかと考える。ここでの社会とは、仕事などの経済活動をしているかどうかではなく、他の人間、コミュニティということである。それは、家族のように生まれながらにある関係はもちろん、ご近所付き合いや仕事場、ささしまサポートセンターといったような必然的ではない関係も含まれる。

そして居場所は一つではなくたくさんあると思う。震災で家を失い知らない人ばかりの馴染みのない土地で新しい生活を強いられ、また居場所を失って孤独であるといった点で、仮設住宅にすむ被災者は、アパートに住むようになった元路上生活者と似ているのかもしれないとボランティアさんの話を聞いて感じた。そのような元路上生活者に福袋を配布することは、直接会うことができないとしても、少しでも社会とのつながりを感じてもらうといった点で、意味のあるものである。アパート生活をしている人に、孤独を自覚していないくとも、ささしまがある、とささしまサポートセンターという集団に居場所を感じてもらうことができるのではないか。また、団地にあるカフェ実際に連れて行って、積極的にお客さんに話しかけることで高齢者の孤立を防ぐ取り組みがあることも教えてくださった。この経験から、社会とのつながりは他人と顔見知りになって定期的に関わることだけではなく、お客様と店員さんのような、もう一度あるかわからないような一時的なものもあるのではないかと考えた。

そんな孤独について考えながら、木曜生活医療相談でみた、路上生活者の人の生き方を思い出した。路上生活=孤独ではない。高架下での路上生活にもご近所付き合いのような、あるいはそれより親密な関係があったことが衝撃的だった。ボランティアさんの話の中で、この前あそこでケンカがあったけどあの人が仲裁した、だとか、あそこに住んでいた人最近見ないね、といったやりとりをしていた。私の近所付き合いといえ

ば、はほぼないに等しく、朝早く家を出る日は向かいの家の小学生に会えるか、といった希薄なものだ。しかし、高架下での路上生活のご近所付き合いは濃いものである。毎日炊き出しに行けば同じ空間でご飯を食べるし、それぞれの寝床を仕切る段ボールやテントは簡易的なもので、声をかけやすい場所にいる。体調を崩せば周りの人がすぐに察知できる。そういった他の仲間とのかかわりによって路上生活は、安心して住める家ではなくても彼らの居場所になっていることがあるのではないかと考えた。

しかし、高架下の社会、すなわち路上生活者の交流の場は、家に住む人に比べて危なくて流動的である。高架下のコミュニティが心地よくてずっと過ごす人もいれば、悪口や噂話がストレスになって、路上生活仲間が少ない場所で生活する人もいた。住みかがある人に比べて、フットワークも軽く、ここは居場所ではないと感じたら、すぐに他の場所に移ることができるのである。

アウトリーチ活動に参加した際に、ボランティアさんが、失敗談として居場所を奪ってしまった話をしてくれた。毎日スーパーに1人でいる方を見かけて、生活に困っているのではないかと思い声をかけてみたところ、その時の応対は良かったものの、次の日からそのスーパーには姿を現さなくなってしまったのだそうだ。心配に思って、周辺のスーパーを何軒か尋ねたところ、以前のスーパーよりも条件の悪いスーパーにいる姿を見つけたのだという。ボランティアさんは失敗談と言ったが、私はこの話が失敗だと言い切れないと思う。完全に私の予想になってしまったが、最終的に今までいた物理的な場所を変えることになってしまったことは事実であるが、ボランティアさんとお話ししたことはスーパーの方にとって、他人との時間を共有したという社会とのつながりを感じることにつながっていると思うからだ。しかし、彼女がボランティアさんと顔見知りの関係になること望んでいなかったために、他の居場所を求めることになってしまっただけなのではないかと考えた。

人間は居場所を求めて生きている。このフィールドワークを通して、今まで関わることのできなかった方々と関わり、生活の様子を実際に見聞きすることを通して、あたかい家と食料があっても、心のよりどころとなるような居場所の必要性を強く感じた。その居場所の条件、他の人間とのつながり方はそれであって、居場所に対する考え方方がその人の生き様であるのではないか。

おわりに

宮地 純一郎

本授業「地域医療フィールドワーク入門」は、文部科学省によるポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業に基づいて、名古屋大学・岐阜大学による「医療人類学とバーチャル教育を活用した屋根瓦式地域医療教育(NOVI+A/濃尾+A)」における取り組みの一つとして始められた授業です。

私は、その事業を担当する教員として、本授業を担当する梅村特任助教の同僚として、また地域医療を担う一人の医師として参加させて頂きました。「地域医療」の教育と銘打っていますが、この授業を私なりに捉え直すとしたら、「人が見知らぬ他者に出会うというのはどういった意味があるのか?」について、それが大学の授業であることや、この授業が地域医療に関連したテーマを扱う時間であることも、一旦取っ払った上で、実際に色々な人に出会うことを通して考え直す試みであったのではないかと思います。ここでいう他者、とは、今回のフィールドワークの舞台となった支援者と、居住地を持たない人たちはもちろん、学生にとっては他の学部の学生や教員である我々自身を、教員にとっては学生を含みます。

そういう他者に出会う過程には一種の不確実さと偶有性がまとわりついています。自分が他者に出会うことが自分とその相手にとってどういう意味をもたらすのかは出会ってみるまで、場合によっては出会った後にもわからないということ。当初自分が想定した通りにはいかず、予想もしていなかったことが起こること。この点は、今回のテーマである地域医療における医療職と患者の出会いにも、あるいは医療に限らない人の様々な活動における出会いにも、そして、今回の授業のような学生と教員の出会いにも一定当てはまると思います。

今回この授業に参加くださった学生の皆様は、まさにそういった不確実性と偶有性を受け止めながら、共にフィールドワークに取り組み、その中で感じ取ったことを、その時の五感と想像力と語彙を尽くして報告しています。それは、自分が感じ取ったことを(今の自分にはまだ言葉にできないことも含めて)正直に表現し、今回の出会いから生じた自分なりの言葉と仮説を大切にした結果でもあり、それが何になるかはまだわかりませんが、今後の何らかの探究と発見につながることを祈っています。

わりあてられた（例えば医師法で示された医師の）役割を全うすることだけで義務を果たしたと役割を隠れ蓑に使うこともせず、自分のしていることは間違いなくよいものだと思考停止に陥るでもない、やっていることの不確実さを承知しながら、他者に出会うことによって自分に何ができるのか、どういった意味が生まれてくるのか、それを考えながら、決断や行動を繰り返す、それは、地域医療の現場で働く医療職にはもちろん、この時代の中で働くすべての人にとって、常にではないにせよ、忘れないでいてほしい構えだと私は感じます。

今回の授業におけるさまざまな形の他者との出会いがどういう意味を持ったのかは、この報告書の時点で見えていることで一度表現はしましたが、それがこれからどうなっていくかは、参加した学生の一人一人と私たち教員が引き受けて、これから作っていくことでもあると思います。この報告書に書かれている内容について、読まれる方によつては、一部は言葉足らずであったり、状況を深くは見渡せていない、と感じられるところもあるかもしれません。それも含めて、これから創していく学びとローカリティの途中経過だとみて頂ければ幸いです。もし、気になる点がある方がいらっしゃいましたら、「顔」のみえる形でお声かけいただけましたら幸甚です。

最後になりましたが、このような授業を受け入れて下さったささしまサポートセンターの皆様、それからこの実習に携わってくださった現場で毎日の生活を続けている皆様に、改めて、お礼を申し上げたいと思います。

2024年1月22日

名古屋大学 総合医学教育センター 宮地純一郎

執筆者一覧

担当教員
梅村 純美（医学系研究科総合医学教育センター特任助教）

世話人・相談役
宮地 純一郎（医学系研究科総合医学教育センター特任講師）

参加学生
荒木 蒼乃

酒井 元樹

江崎 彩乃

鄭 在鴻

萩原 くるみ

吉井 初穂

水谷 倫乃

林本 愛穂

古莊 花和

文部科学省 ポストコロナ時代の医療人材育成拠点形成事業
東海国立大学機構「医療人類学とバーチャル教育を活用した屋根瓦式地域医療教育」

路上の対話を未来へつなぐ

名古屋大学「地域医療フィールドワーク入門」実習報告書 vol.1

2024年2月1日 印刷・発行

編集 梅村 紗美

発行 名古屋大学医学系研究科総合医学教育センター
〒466-8550 愛知県名古屋市昭和区鶴舞町65

印刷 株式会社コームラ
〒501-2517 岐阜県岐阜市三輪ぶりんとぴあ3